

# ガッガル平原における先・原史文化の変遷

上杉 彰紀  
総合地球環境学研究所

## 1 はじめに

小稿ではインド北西部、すなわちサトレジ川以南、チョウタング川以北に広がるパンジャーブ平原東部の文化編年に関するこれまでの研究を振り返り、研究の現状と今後の課題について考察する。

ガッガル平原はインダス文明域内の他地域に比べても多数の遺跡が存在することが知られ (Manmohan Kumar 2009)、ガッガル川をヴェーダ文献に登場するサラスヴァティー川に比定して、インダス=サラスヴァティー文明と呼ぶインド人研究者もいる (Gupta 1996 など)。しかし、ガッガル平原の歴史的重要性を考察するには、基礎的な研究が絶対的に不足しているのが現状である。

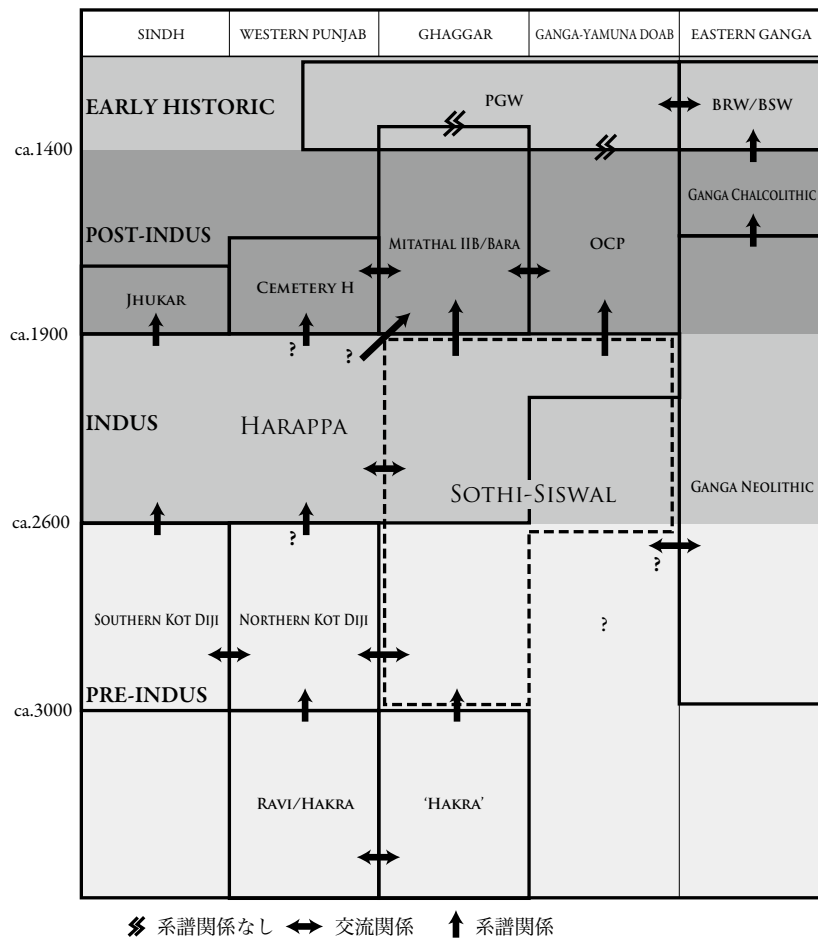


図1 先文明期～文明期における文化編年

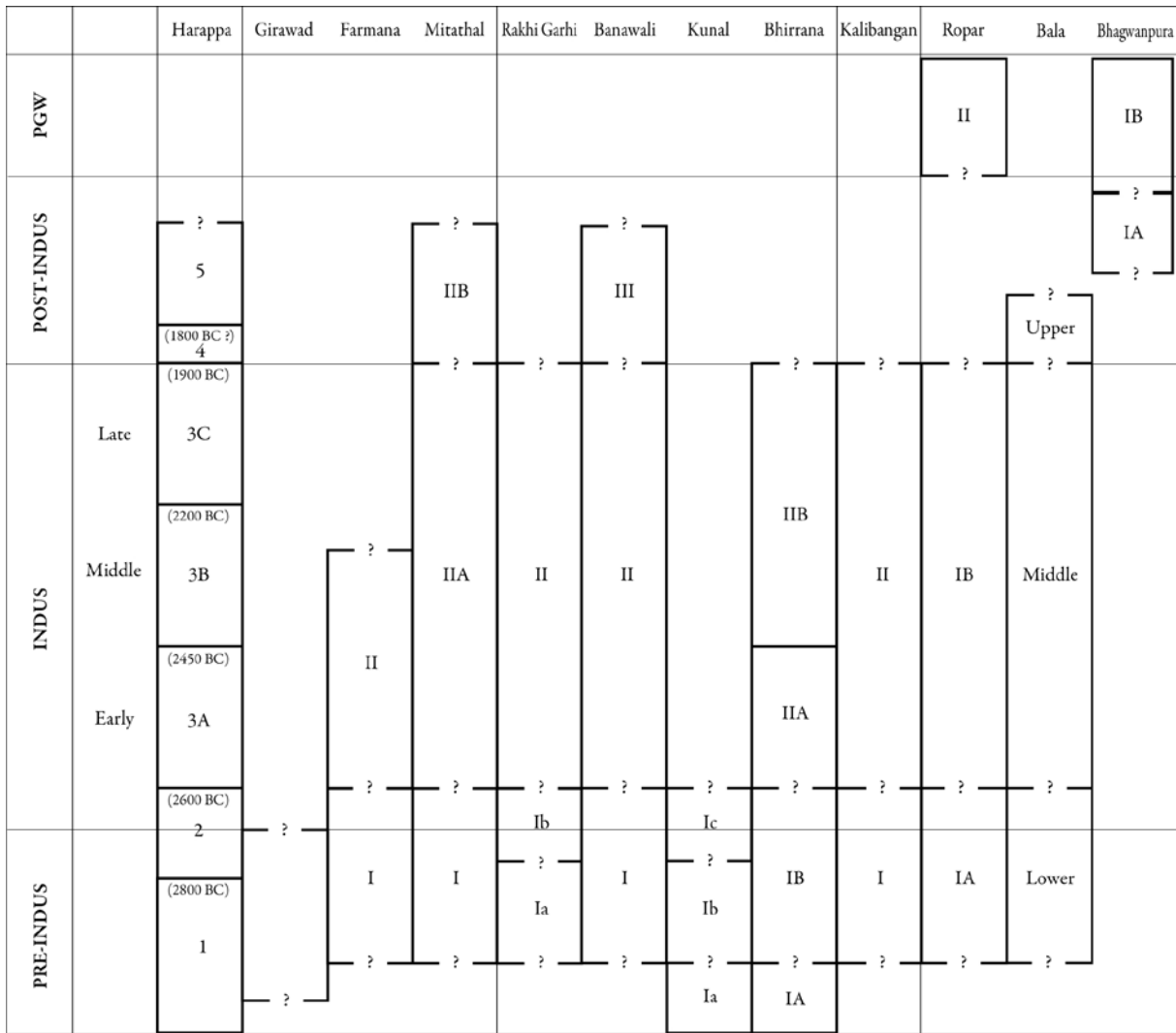


図2 ガッガル平原における文化編年

また、この地域はインダス文明期のみならず、文明衰退後の時代においても北インドの人類社会にとって重要な地域であった。それはとりわけインド・アーリア語族あるいはアーリア人の移住に関してであり、考古学的には前2千年紀後半に登場する彩文灰色土器に関連してである。インダス文明とインド・アーリア語族の関係はいまなお議論の活発な研究課題であるが、考古学の観点からみると、インダス文明の衰退のプロセスとその後の文化変容、そして彩文灰色土器の出現へといたる歴史的過程の解明が北インドにおける歴史時代への展開にとって重要な課題となっている。

関連する問題は数多くあるが、ここでは先インダス文明期からインダス文明期を経て、彩文灰色土器文化期へといたる文化編年を振り返りながら、今後の検討課題を整理することとした。

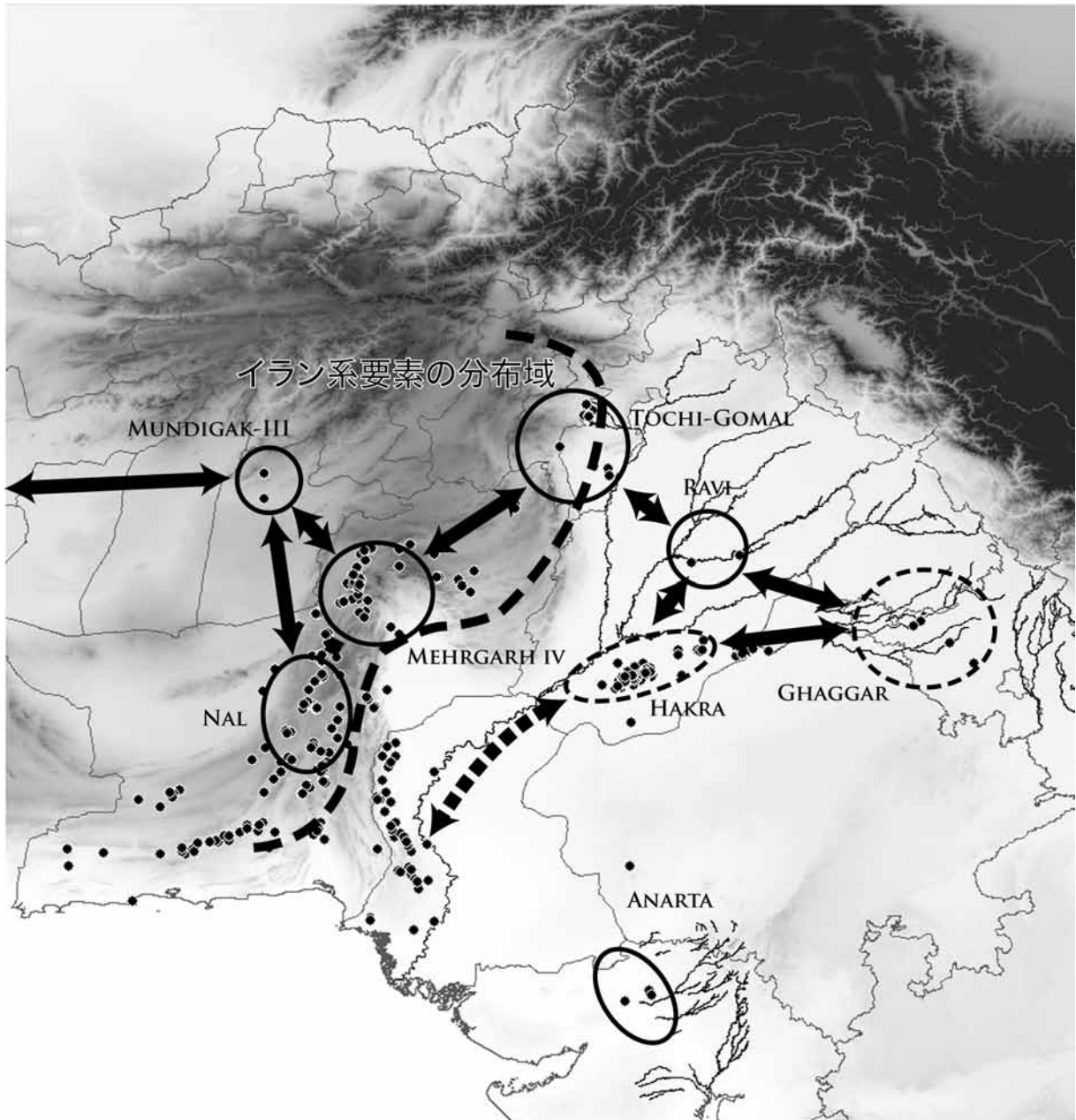


図3 前4千年紀後半の地域文化と地域間交流

## 2 先インダス文明期

### 前4千年紀における問題

1960年代以降、インド・パキスタン両国での発掘調査の進展によって、インダス文明以前の文化の存在が各地で明らかにされるようになった（図3）。パキスタン西部のバローチスタン地方中央部ではメヘルガル遺跡およびナウシャロー遺跡（Jarrige 1986, 1988, 1989, 1990）、同地方北東部ではグムラー遺跡（Dani 1970-71）およびラフマーン・デーリ遺跡（Durrani 1988; Durrani *et al.* 1991; Ali 1994-95）、シンド地方ではコート・ディジー遺跡（Khan 1965）、パンジャーブ地方西部ではハラッパー遺跡（Meadow *ed.* 1991 など）、グジャラート地方ではその北部におけるローテーシュワル遺跡やナーグワダー遺跡（Hegde *et al.* 1988）を代表とする遺跡群、パン

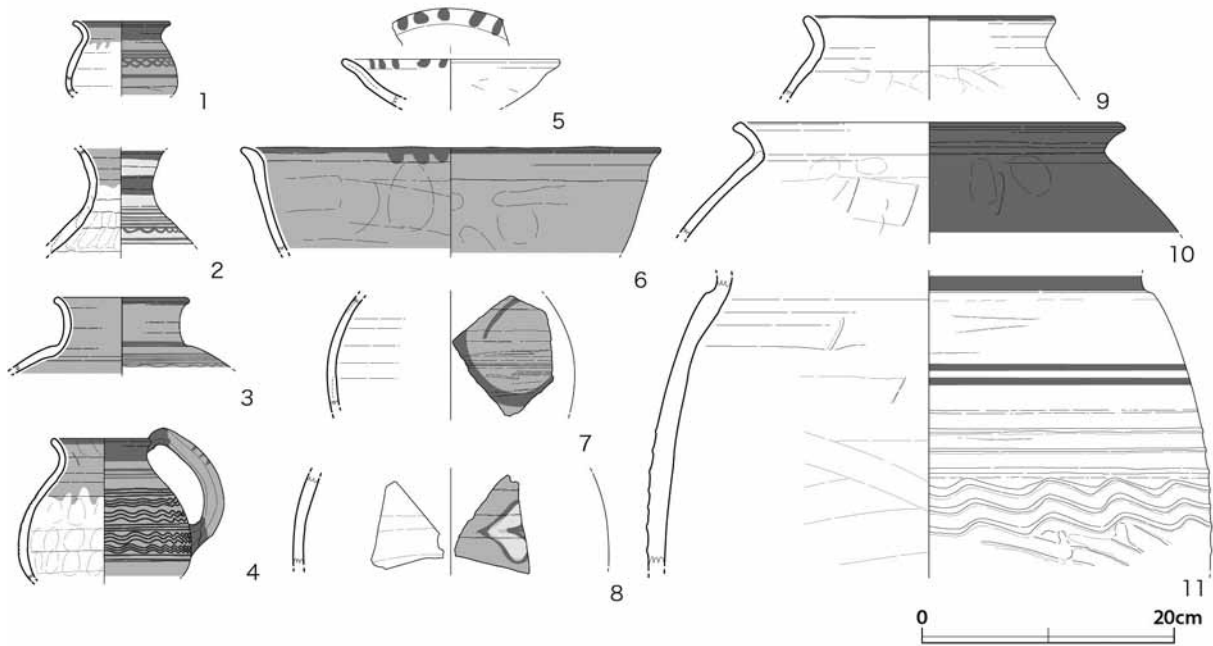


図4 ギラーワル遺跡出土の先文明期の土器

ジャープ東部ではカーリーバンガン遺跡 (Lal *et al.* 2003) およびバナーワリー遺跡 (Bisht 1977, 1982, 1999) などの調査が先文明期の代表的遺跡といえるだろう。

M.R. Mughal は 1970 年代初頭にこうした先文明期の遺跡の研究を通して、インダス文明の母体として初期ハラッパー文化の概念を提唱し、初期ハラッパー文化からインダス文明への連続的發展を説いた (Mughal 1970)。その後の調査は Mughal の説を追うかのように先文明期の様相を明らかにしてきたといえるだろう。初期ハラッパー文化からインダス文明への展開を具体的に論じるにはいまなお数多くの研究課題が残されているが、Mughal の研究によって先文明期への視座が準備されたことは確かなところである。

パンジャブ地方東部においては、文明期に都市として発展するカーリーバンガン遺跡で先インダス文明期の文化層が確認され、またその東方においてもシースワール遺跡 (Suraj Bhan 1971-72) やミタータル遺跡 (Suraj Bhan 1975)、ソーティ遺跡 (Dikshit 1984b) の調査によって、先文明期から文明期にかけての文化編年が提唱されるにいたった。その結果、この地域には先文明期においてソーティ・シースワール文化と呼ばれる文化が広く存在することが明らかとなっている。

その後、1990 年代から 2000 年代にかけて、パンジャブ地方東部の中央を横断して流下するガッガル川流域での調査が進展し、先文明期の文化様相に新たな情報が加えられることとなった。その代表としてクナール遺跡 (Khatri and Acharya 1995)、ピッラーナー遺跡 (Rao *et al.* 2004, 2005, 2006)、バロール遺跡 (Sant *et al.* 2005)、タルカーネワラー・デーラー遺跡 (Tripathi and Patnaik 2004) を挙げるができる。また、筆者が属するインダス・プロジェクトによるギラーワル遺跡も先文明期の遺跡である (ただし前 3 千年紀前葉も含む) (図 4)。

クナール遺跡に関してはごく短文の報告しかなく詳細が不明であるが、報文中で先文明期の土器群と、ガッガル川をパキスタン側に下ったハークラー川流域のチョーリスターン地方で提唱されたハークラー式土器 (Mughal 1997) との類似性が指摘されたことは先文明期の理解にとって重要な問題である。上記の通り、クナール遺跡は詳細が不明であるが、その成果を跡づけ

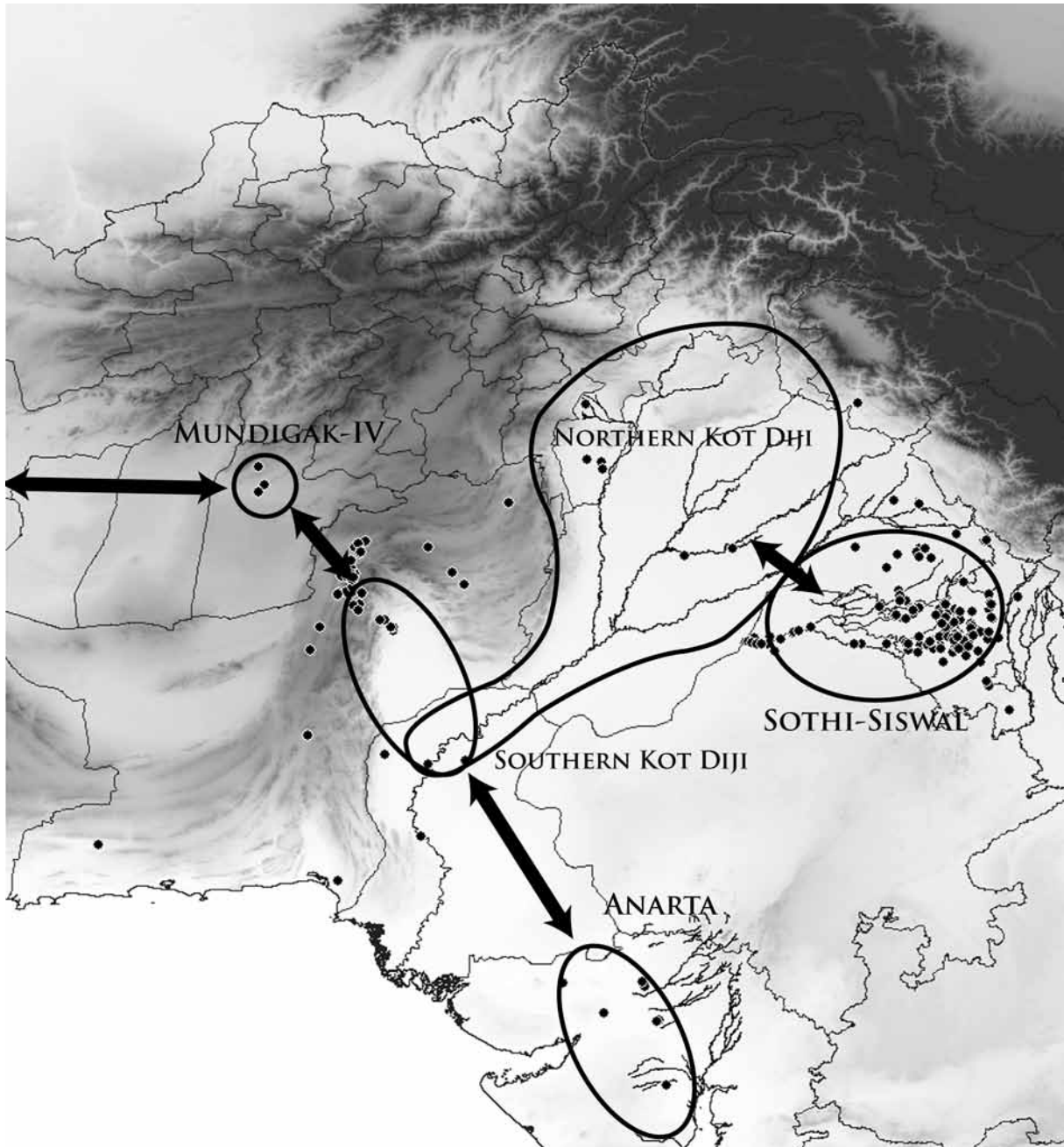


図5 前3千年紀前葉の地域文化と地域間交流

るように近傍に所在するビッラーナー遺跡で同じくハークラー式土器との類似性が指摘される土器群が検出されている。残念ながらビッラーナー遺跡も概報のみで詳細がわからないが、一部公表された土器の写真と記載をみると、一部ハークラー式土器に類似する土器が出土していることが確認できる。

しかしながら、チョーリスターン地方の土器とは異なる特徴が存在することも確かであって、両者を同一の土器群と認定するには困難がある。その一方で、類似性に着目すれば前4千年紀の段階においてガッガル・ハークラー川流域に土器の類似性を生起させる文化交流が存在したことは確実であり、今後の資料の公表を俟って詳細な分析を進める必要がある。このことは、文明社会の成立に向けて大きく地域社会間の関係が変容する前3千年紀前葉の前段階においてどのような地域間関係が存在したのか、それがどのように変質を遂げ、文明社会の成立へとつ

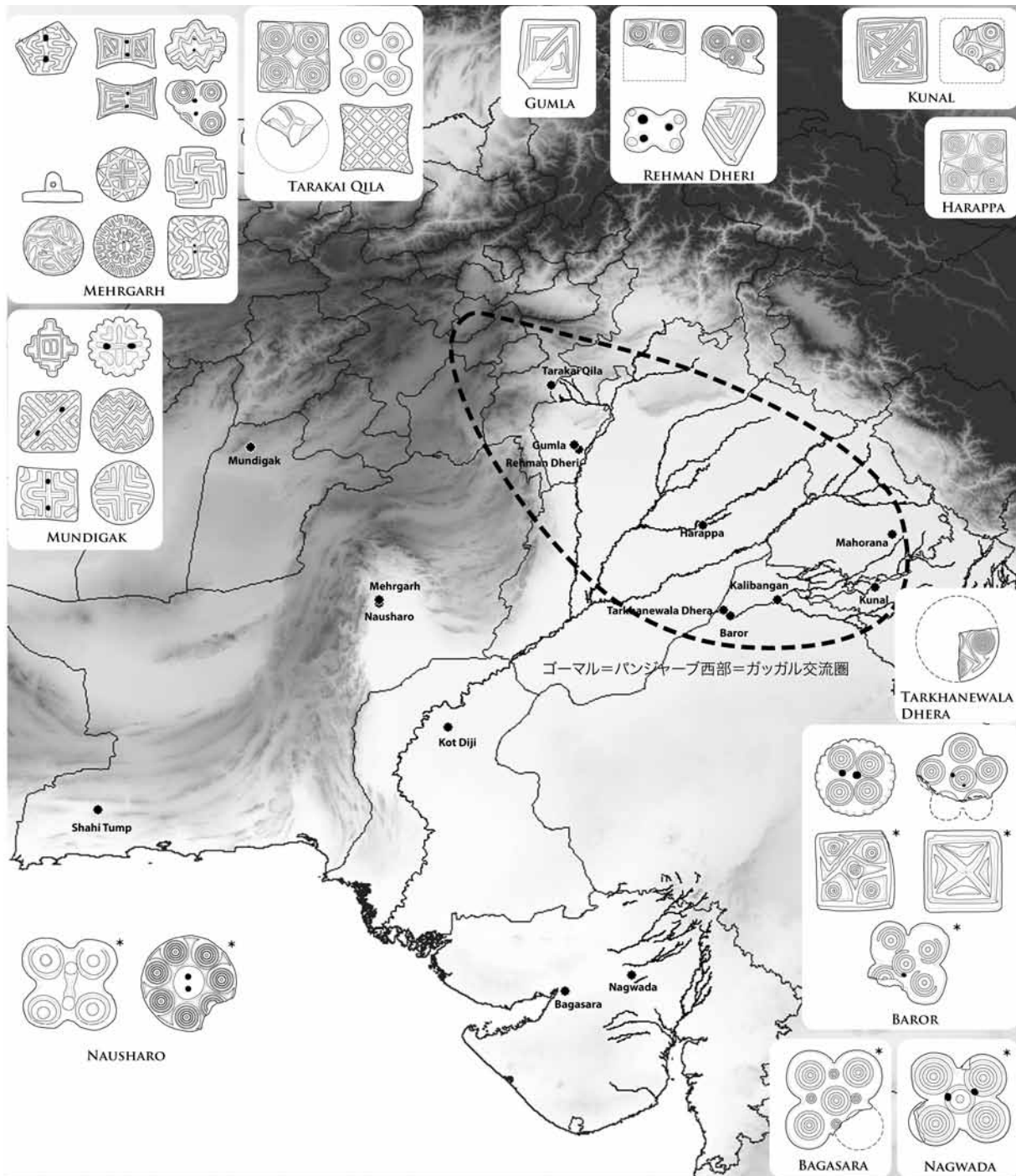


図6 前3千年紀前葉～中葉における凍石製幾何学文印章の分布  
 (\*は文明期出土)

ながることになったのか評価する上で重要な問題である。

**前3千年紀前葉＝初期ハラッパー文化期の問題**

先にパンジャブ地方東部には先文明期の文化としてソーティ・シースワール文化が存在したことを述べたが、筆者自身による先文明期のギラーワル遺跡 (Shinde *et al.* 2008a) と文明期のファルマーナー遺跡 (Shinde *et al.* 2008a, 2008b) の出土資料の検討を前提にすると、ソーティ・シースワール文化を表象する土器様式は前4千年紀の「ハークラー式土器」を母体になっている

可能性が高く、さらにソーティ・シースワール文化はインダス文明期にも在地の土器として存続している可能性が高い。

前3千年紀前葉に限定すると、ソーティ・シースワール式土器と周辺地域土器様式との関係が問題となる（図5）。この時期にはパンジャブ西部からバローチスタン高原北東部のゴーマル・バンヌー地方には北方型コート・ディジー式土器、シンド地方には南方型コート・ディジー式土器、グジャラート地方にはアナルタ式土器が分布している（上杉 2008a, 2008b）。ソーティ・シースワール土器は幅広黒色帯による装飾をもつ壺を特徴とするが、そのほかには変形獣角文や多彩な幾何学文を挙げることができる。また深い櫛描平行沈線文を内面に刻む鉢も特徴的である。そうした中で変形獣角文やピーパル文など、西方のパンジャブ地方西部やゴーマル地方につながる要素が存在することは注目される。

ピーパル文はバローチスタン高原に広く分布する彩文要素であり、平原部ではきわめて少ないという特徴がある。ソーティ・シースワール式土器においても決して多くないものの若干の例がある。このことと、平原部での彩文伝統の特質から考えると、平原部で別個にピーパル文が誕生する可能性は少なく、直接的にせよ間接的にせよバローチスタン高原との交流関係を示唆している。

また、獣角文は北方型コート・ディジー式土器の分布域と重複しており、ソーティ・シースワール式土器と北方型コート・ディジー式土器の関係を示す。ただし、変形獣角文に限って言えば、獣角先端にひげ状突起が加えられるなど、北方型コート・ディジー式土器の獣角文とは違いがあるのは事実である。このことはソーティ・シースワール式土器が北方型コート・ディジー式土器と同じく黒色帯を採用しながらも、器種構成や器形の点で違いをみせることとも連動して、ソーティ・シースワール式土器の独自性を物語っている。

このようにみえてくると、ソーティ・シースワール式土器は西方の土器様式群と関係性を有しながらも独自の特徴を具えた土器様式と判断することができる。チョーリスターン地方やパンジャブ地方西部の当該期の公表資料が少ないのも問題ではあるが、すくなくとも公表資料から追う限り、現在のインド・パキスタン国境付近がソーティ・シースワール式土器の分布西限と推定される（ただし、分布境界付近では隣接土器様式の要素も強くなるので、その変化は漸移的であろう）。ここで問題となるのは、前3千年紀前葉になぜ他の土器様式とは峻別されるソーティ・シースワール式土器が成立したかということである。この問いに答えるには絶対的に資料が不足しているものの、カーリーバンガン遺跡の先文明期集落に周壁が存在することも無関係ではなからう。

この時期、ゴーマル地方からパンジャブ地方西部、パンジャブ地方東部には同心円文を刻んだ凍石製印章が広く分布している（図6）（Uesugi 2008）。このことは獣角文の分布と同様に、これらの地域における地域間交流の強化を物語っているが、地域間交流の活発化はその拠点となる中心地の形成を促進し、その結果として逆に中心地の周辺で地域社会の独自性が強まるという相反する現象を示唆している可能性がある。ソーティ・シースワール式土器の成立はそうした地域間交流と地域社会の関係の中から生み出された土器様式と考えられる。地域間交流によってそこに参画する地域社会のアイデンティティが形成・強化されるのではなからうか。文明社会の成立という地域間関係という社会構造の再編を考える上で一つの手掛りにならう。

## 4 インダス文明社会の成立とガッガル平原

### 都市の形成

何をもって文明社会の成立を捉えるかという問題については、暗黙の了解として都市の成立、インダス式印章およびインダス文字の出現が基準となっている。しかしながら、それぞれの要素がどのようにして出現したのかという問いに十分に答え得る資料はないのが現状である。

都市の成立を考古学的に把握することは、最も難しい問題である。一つには都市の成立過程を追うことを可能にするような、面的な発掘調査がきわめて少ないという実際的制約がある。モヘンジョダロ遺跡では文明期の城塞部、居住区域の広範な調査が行われているものの、遺構群の時間的変遷は十分に明らかになっておらず、かつ湧水のため下層の調査が実質不可能であるという問題がある。カーリーバンガン遺跡、バナークワリー遺跡、ラーキー・ガリー遺跡 (Nath 1998, 1999, 2001)、ドーラーヴィーラー遺跡にしても、文明期の建築遺構の存在によってその下層に眠る先文明期の建築遺構の調査が妨げられ、都市の形成過程を十分に把握するにはいたっていない (Bisht 1991, 1999)。

その点、ハラッパー遺跡は都市の形成過程の把握をめざした調査が実施されており、さまざまな課題はあるにせよ、先文明期終末から文明期初頭までに居住範囲が拡大し、居住区域の一つであるマウンド E を囲繞する周壁が造営される様子が明らかにされている。

一方では、何をもって都市とみなすのかという問題もある。都市を考古学的にどのように定義するかという問題については数多くの研究と定義が世界各地でなされているが、都市という生活空間に限ってみると、集住を原理とする居住空間の成立と大規模な労働力を投下してのモニュメントの建設が一つの基準となろう。周知のとおり、モヘンジョダロ遺跡では街路によって区画された居住空間が発掘されている。中庭と部屋列を組み合わせた平面設計をもつ住居を连接的に配置するという居住空間パターンがあり、集住という居住形態に基づいていることがわかる。

ファルマーナー遺跡でも、その調査範囲は限られるものの、文明期の日干煉瓦積建物群が検出されており、街路による区画と中庭+部屋列からなる居住空間パターンが確認されている (図 9・11)。中庭や部屋の内部には貯蔵施設としての埋甕と調理施設としての炉が併置され、厨房空間が住居内に取り込まれていたことがわかる。このことは生活の基本的営為が住居の内部で行われていたことを示しており、その広がりとして把握される居住区域は集住する人々の生活空間であったことを理解することができる。

詳細な報告はないものの、こうした街路による区画と中庭+部屋列からなる居住空間の接続を特徴とする集住空間は、モヘンジョダロ遺跡 (Marshall 1931; Mackey 1938; Sarcina 1979)、ファルマーナー遺跡のほかに、ナウシャロー遺跡、ハラッパー遺跡、カーリーバンガン遺跡、ドーラーヴィーラー遺跡、ピッラーナー遺跡などでも確認されており、遺跡の規模の差と関わらずに文明期に広く採用された居住形態であったとみなすことができる。

先文明期の遺構の平面的検出例はきわめて少ないが、メヘルガル遺跡では文明期直前 (前 2700 年頃) の VII 期の居住域の一部が検出されている (Jarrige *et al.* 1995)。それによれば、大規模な日干煉瓦積壁に近接して部屋が接続して配される居住空間パターンが存在していたことがわかる。前 7 千年紀から前 4 千年紀前半に位置づけられる I～III 期においては、個々の建物が分散的に存在している集落の様子が窺われ、集住原理に基づく居住空間パターンは早くとも



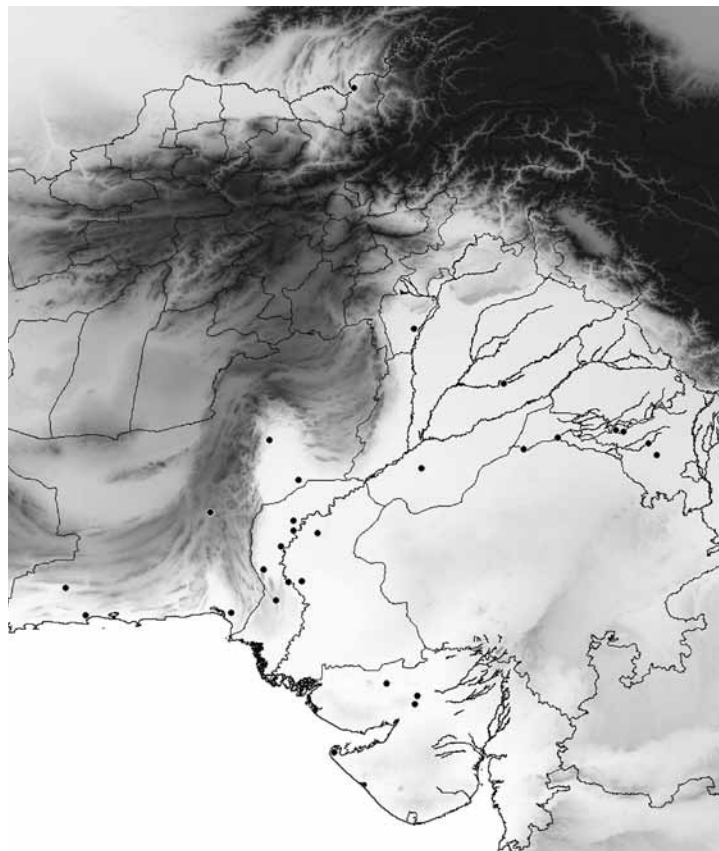
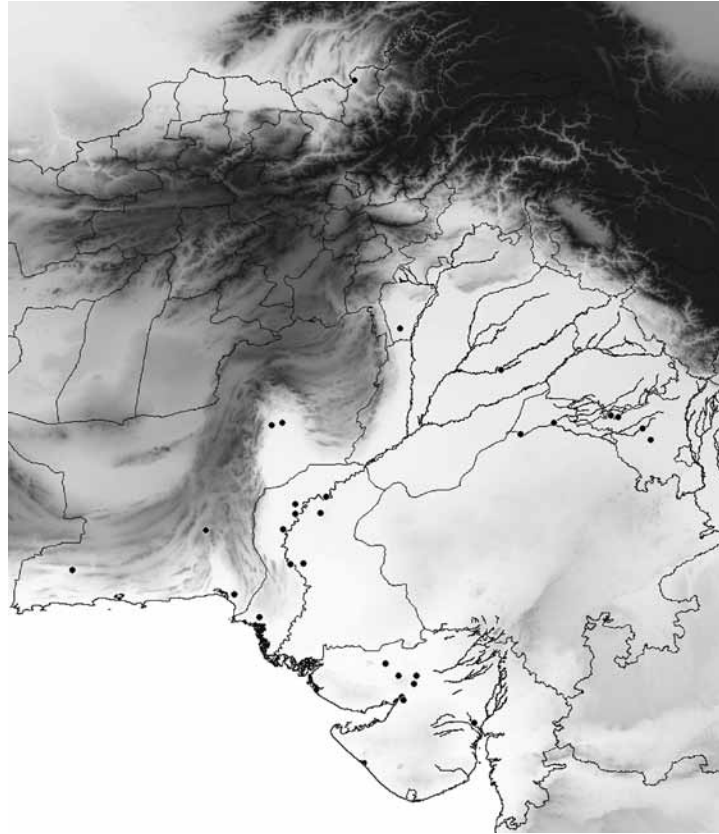


図7 インダス文明の範囲  
(上：インダス式印章の分布、下：古段階のハラッパー式彩文土器の分布)

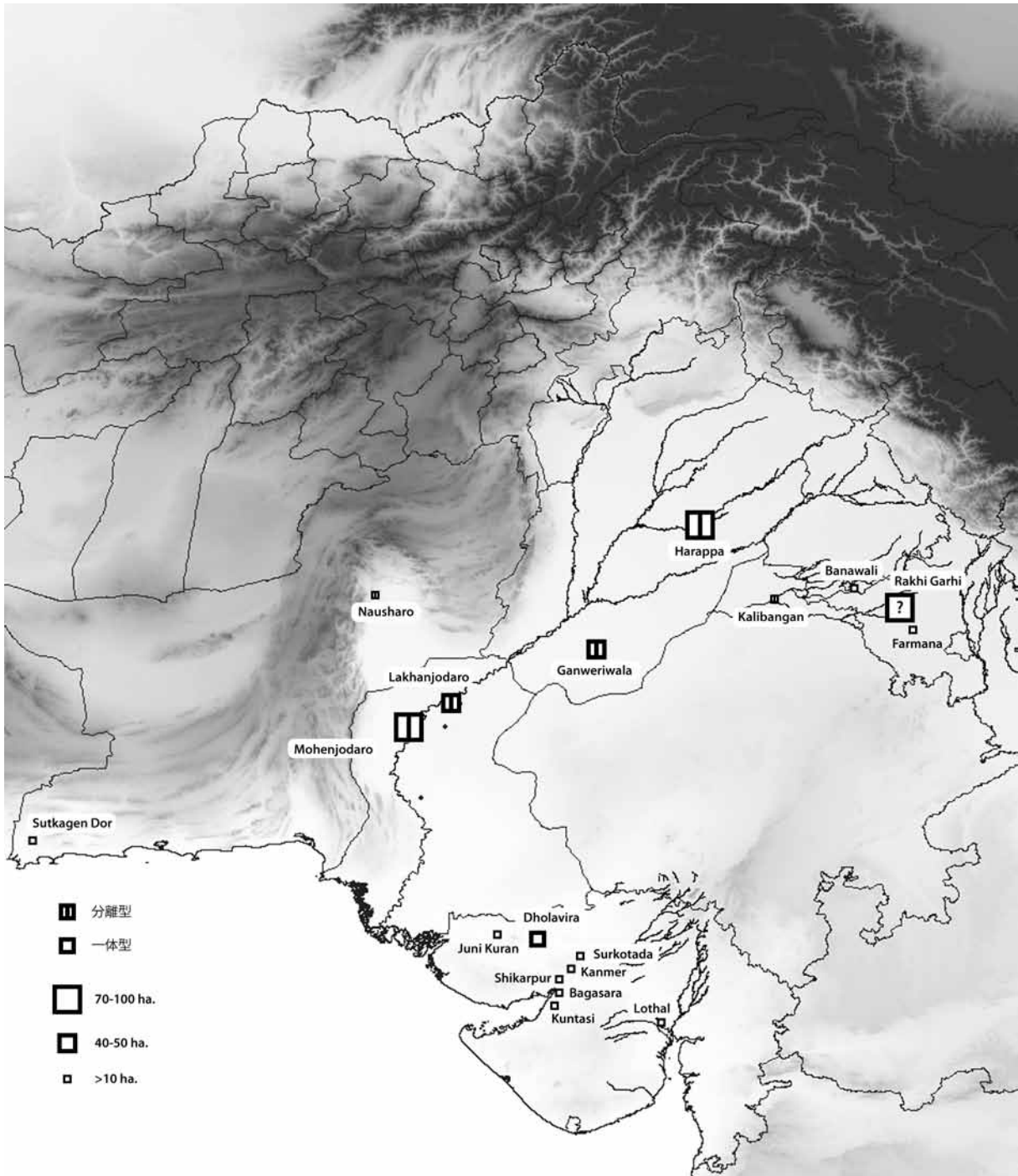


図 8 インダス文明期の都市もしくは拠点集落の分布

前 4 千年紀後半以降に成立したことを示唆している。

一方、ガッガル平原では、前 4 千年紀後半に位置づけられるハークラー文化期のピッラーナー遺跡において竪穴住居に推定される遺構が検出されている。ギラーワル遺跡でもその可能性をもつ大形土坑群が検出されている。これらの遺構が住居かどうか慎重な吟味を必要とするものの、前 4 千年紀後半のガッガル平原では集住原理に基づいた居住形態が採用されていなかった可能性は注目される場所である。

集住原理に基づいた居住形態がいつの段階に成立したのか、今後の調査・研究で明らかにしていくことが求められる。さらに集住という行為がどのような社会背景のもとで生み出された

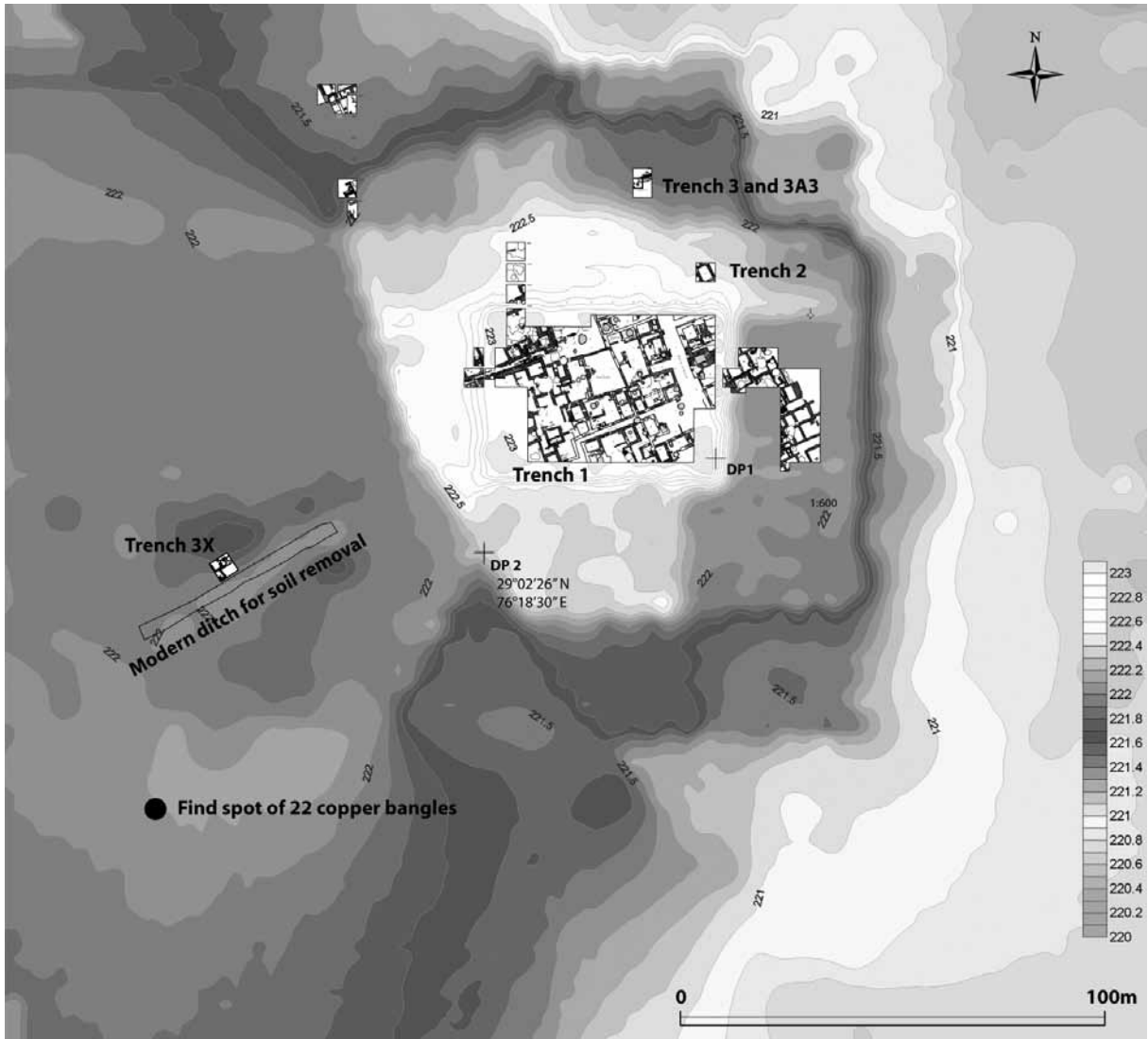


図9 ファルマーナー遺跡 居住区域

のか理解することも不可欠である。集住原理は、分散居住の傾向をもったであろう村落の居住原理とは異なり、特定の場所に居住域を確定し、そこに相対的にせよ多数の人口が居住することを前提にしている。その規模が大きくなれば都市ということになるが、集住という原理もしくは行為自体が都市的な居住形態と考えてよいであろう。とすれば、先文明期の終末までには集住原理にもとづく都市的な生活パターンが形成されつつあったことになる。

さらに集落を囲繞する周壁も居住形態を考える上で重要であろう。定住集落であれば、その範囲を示し外敵の侵入を防ぐための何らかの施設を設けることは世界的に確認される場所であるが、集落の規模の増大とその内部における集住原理にもとづく居住空間の存在と組み合わせると、都市もしくは都市的集落を特徴づける要素となる。文明期の都市（もしくは都市的集落）はその多くが周壁によって囲繞されていることが知られている。城塞部と居住域を分離してそれぞれを周壁によって囲むもの（ハラッパー遺跡、カーリーバンガン遺跡、ナウシャロー遺跡）と、両者を一体化して全体を周壁で囲繞しその内部をさらに城塞部と居住域に分割するもの（ドーラーヴィーラー遺跡、ロータル遺跡（Rao 1979）、スールコートダー遺跡（Joshi 1990）、バナーワリー遺跡）があるが（図8）、周壁によって集住原理をもつ居住域を囲むというのは文明期に一般的であったことがわかる。小規模な遺跡でも集落の全体ないしは一部を周壁によ

って囲んだ例がある。バガーサラール遺跡 (Sonawane *et al.* 2003) やバールー遺跡 (Kesarwani 2001, 2002)、さらにはインダス・プロジェクトで発掘調査を実施したカーンメール遺跡 (Kharakwal *et al.* 2007, 2008) がそれで、数ヘクタール以下の範囲を周壁によって囲んでいる。バガーサラール遺跡では周壁外部で生活痕跡も確認されており、集落全体を囲むのではなく特別な空間を区画するための施設であった可能性もある。

周壁は先文明期終末の初期ハラッパー文化期の遺跡でも確認されており (ハラッパー遺跡、カーリーバンガン遺跡、ラフマーン・デーリ遺跡、バナーワリー遺跡など)、それぞれの遺跡の範囲とも合わせて初期ハラッパー文化期には都市的空間が形成されつつあったことを示している。

カーリーバンガン遺跡やバナーワリー遺跡といった都市もしくは都市的集落、さらにはバールー遺跡のような小規模集落がガッガル平原にも存在しており、初期ハラッパー文化期から文明期にかけて周壁によって囲まれる集住空間が形成されていた。すでに述べたように、初期ハラッパー文化期にはガッガル平原と西方との交流関係が強化されており、そうした社会背景のもとにガッガル平原における拠点集落の形成と集住空間の成立が生じた可能性が高い。

### 印章からみた文明社会の仕組み

インダス式印章と、それに不可分に結びつくインダス文字の起源に関しては、先文明期終末に同心円文を刻んだ凍石製印章がパンジャブ地方西部からガッガル平原に広く分布することを先に述べたが、それがインダス式印章に直接結びつくわけではない。周知の通り、インダス式印章は動物意匠とインダス文字の組み合わせ、方形の平面形態、背面の鈕を特徴としており、同心円文印章とはまったく異なっている。

インダス式印章はその独自の意匠と形態からみて、インダス文明社会としての社会的統合を志向する政治権力と不可分に結びつくものと考えられる。インダス文明社会としての地域社会の統合を達成するためには、そのためのイデオロギーとそのシンボルが必要となる。先文明期においてイラン高原から伸びてくる広域交流ネットワークの末端につながるかたちで展開してきたインダス平原の地域社会が、広域交流ネットワークにつながりながらも独自のネットワークを基盤として地域社会としての統合を果たしたのがインダス文明社会であり、インダス式印章はその象徴であったと推定される。

このように考えると、インダス式印章の出現がインダス文明社会の成立を考える上での一つの有力な手がかりとなる。図 6 にインダス式印章の分布を示した。数量の多寡はあるものの広大な地域にインダス式印章が分布している。この範囲はハラッパー式土器の分布範囲とも重複している。遺跡数・出土数量ともに最も多いのはシンド地方であり、それにパンジャブ地方西部が次ぐ。ガッガル川流域では 4 遺跡 (ラーキー・ガリー遺跡、バナーワリー遺跡、ビッラーナー遺跡、ファルマーナー遺跡) でインダス式印章が出土している。

インダス式印章にもさまざまなヴァリエーションがあり、近年の調査・研究でそれらのヴァリエーションが時間的・空間的変異を示している可能性が高くなっている。層位的にインダス式印章の時間的変化を示す良好な資料が得られている遺跡が少ないため今後の調査・研究の進展が不可欠ではあるものの、ファルマーナー遺跡では異なる 2 つのタイプのインダス式印章が層位的に分離するかたちで出土しており注目される。

ファルマーナー遺跡の居住区域の調査では、平面形態および平面配置の異なる日干煉瓦積建

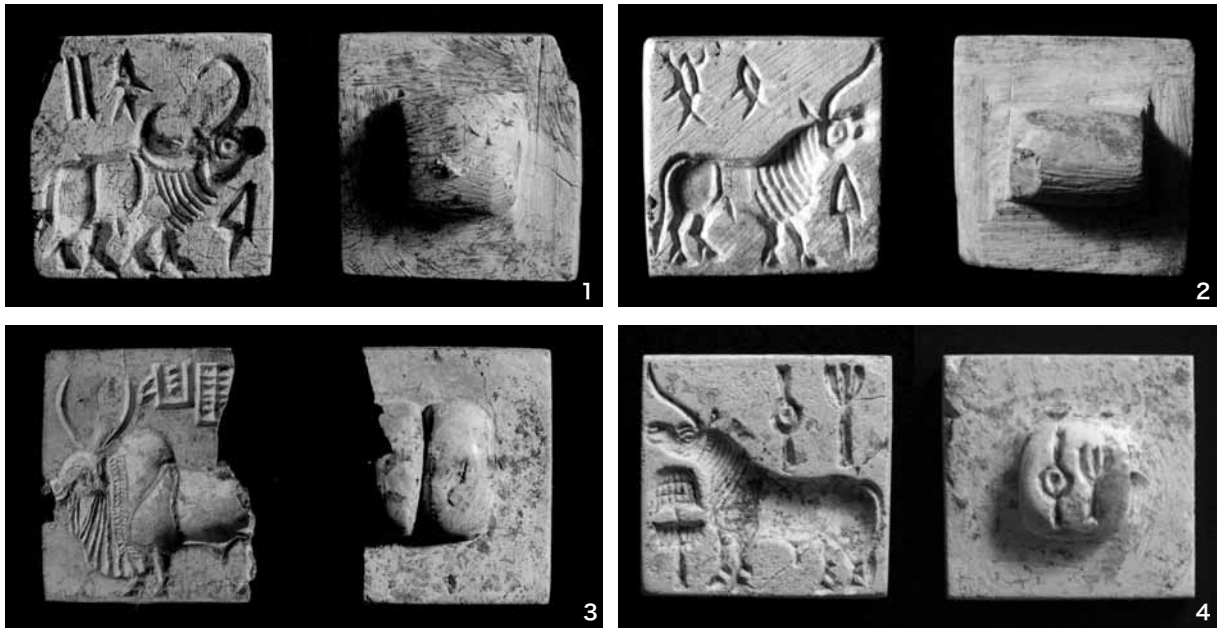


図10 ファルマーナー遺跡出土 インダス式印章  
（上2点：下層、下2点：上層）

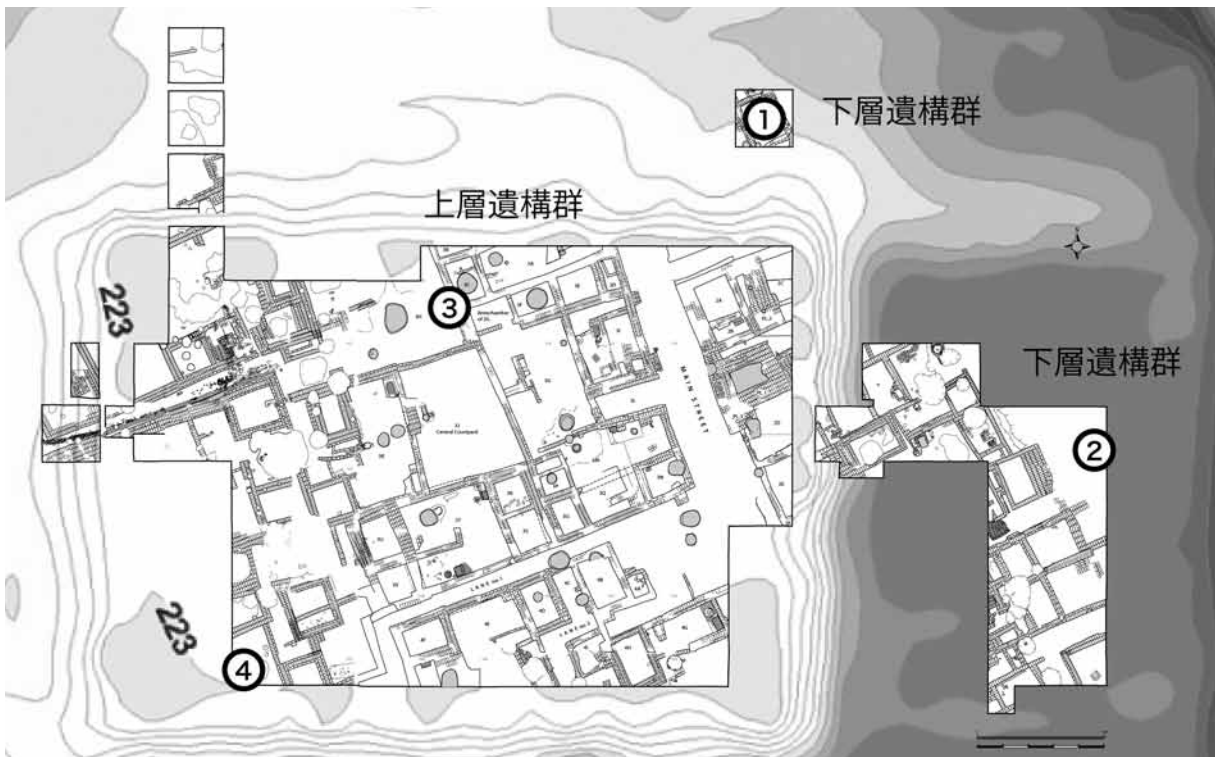


図11 印章の出土位置

物群が上下に重複して検出されたが、下層建物群に関連する層位から2点、上層建物群に関連する層位から2点が出土している（図11）。下層建物群から出土した2点はそれぞれ右向きのスイギュウ（図10:1）と一角獣（図10:2）を彫出し、動物の前面に鋌形文字、上側に2つのインダス文字を刻む。ともに魚形文字を含む。円形の眼の表現、垂直に近く掘り込まれた胴部、断面V字状の刻線で表現される四肢をもつ点でも共通する。また、背面の鈕は半円筒形を呈する。

一方、上層建物群で出土した2点は、それぞれ左向きのコブウシ（図 10: 3）と一角獣（図 10: 4）を刻む。胴部の彫り込み断面は丸みを帯びる。背面の鈕はコブウシの例が二重型、一角獣の例では扁平な隅丸方形を呈する。一角獣の例では動物の前面にいわゆる「供献台」（ritual offering stand）が置かれる。2点ともに動物の上側にはインダス文字が刻まれている。

下層の2点と上層の2点でその意匠的・技術的特徴は明確に異なっており、それが層位的に分離して出土している状況は、時間的変化を示す可能性が高いといえるだろう。下層建物群、上層建物群ともに出土する土器は、ハラッパー遺跡の時期区分との併行関係で示せば3A期を中心とし一部3B期にかかると推定されるハラッパー式土器が出土している。これは G. Quivron によるハラッパー式彩文土器編年（Quivron 2000; 上杉・小茄子川 2008）でみると（図 12）、文明期古段階から中段階に相当する。すなわち、ファルマーナー遺跡で出土した上下2群のインダス式印章は、文明前半期における時間的変化を示すものと理解することができる。

前稿（上杉 2008b）においては、右向きの動物を刻む一群が新しい可能性を想定していたが、少なくともファルマーナー遺跡では古い段階を示すものであることが確認できた。このことは出土土器とあわせて、文明期の古い時期にハラッパー文化の要素がガッガル平原の奥深くに流入していたことを示しており、文明社会の成立を理解する上で重要な鍵となる。

ハラッパー文化はシンド地方およびパンジャブ地方西部において成立した可能性が高いが、それが強い拡散性もしくは拡大性という社会・文化的志向性をもつものであり、先文明期に各地で成立した地域社会・文化を一つの仕組みの中に取り込んで、インダス文明社会を成立させたと考えられる。もちろんハラッパー文化と地域社会・文化群の関係は一方向的なものではなく、双方向的な関係にあったと考えられるが、ハラッパー文化以外の地域文化の要素が広域に拡散するという現象はみられず、各地でハラッパー文化と組み合わせることで地域社会の構造を形成していたことは確かである。そうしたハラッパー文化と地域文化の組み合わせによって成り立つ地域社会が、ハラッパー文化のもつ仲介者的な機能を介して一つの文明社会の仕組みをつくりあげていたと理解することができるであろう。

ゆえにハラッパー文化がいつ各地の地域社会に入り込んでいったのか把握することが文明社会の構造を理解する上で重要となる。Quivron 編年によれば、古段階の彩文土器が各地で出土しているという。文明の西限の遺跡と考えられるソトカーゲン・ドール遺跡、北のヒンドークシュ山脈を超えて飛び地的に存在するショールトゥガイ遺跡（Francfort 1989）、南東のグジャラート地方に位置するドーラーヴィーラー遺跡、スールコータダー遺跡、ロータル遺跡と、私たちがインダス文明の最大範囲として理解する範囲で古段階の土器が出土しているのである。さらにファルマーナー遺跡の調査によってガッガル平原の奥深くまで古段階の土器が存在することが確認され、文明前期にハラッパー文化の要素が広域に拡散していることが明らかとなった。さらにインダス式印章においても古い段階の資料がガッガル平原に存在していることは、土器の分布と一致するだけでなく、文明社会のネットワークの広がりを把握する上で重要な意味をもつ。

先に述べたように、インダス式印章は先文明期の印章とはまったく異なる形態と図像的特徴をもっており、インダス文明社会が西南アジア世界の中で一つの独立した社会構造をもつことを意味している。ゆえにその分布によってインダス文明社会の域内ネットワークの範囲を確定することができるのである。それが文明期前期にガッガル平原に存在するということは、ガッガル平原がこの時期に文明社会のネットワークに組み込まれていたことを物語っている。他地

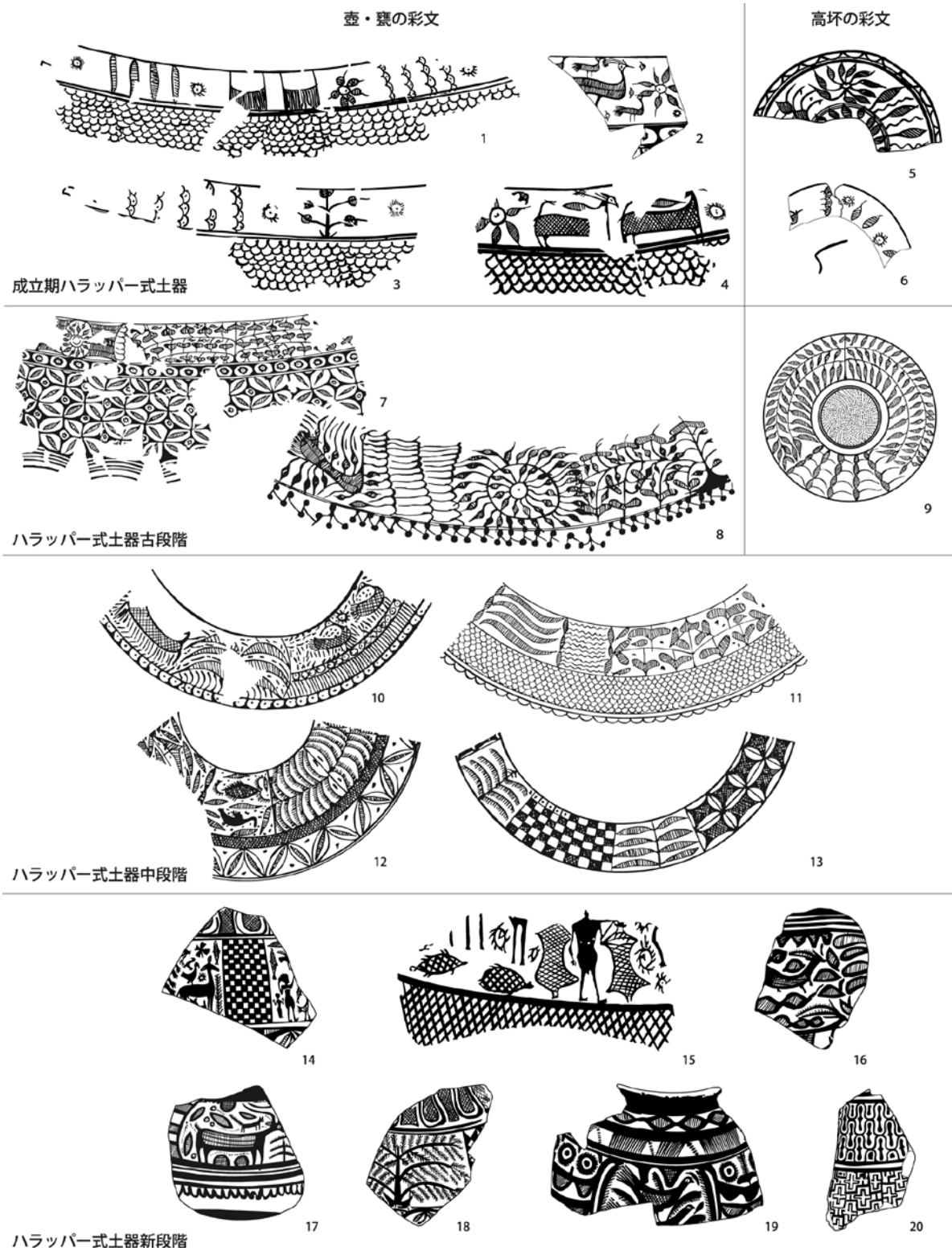


図 12 ハラッパー式彩文土器の編年（上杉・小茄子川 2008）

域でのインダス式印章の層位的出土例については十分な報告がなく、不明であるが、インダス文明社会がハラッパー文化の成立を一つの契機として、比較的短期間に広範な地域に展開した可能性が高いといえるだろう。それには先文明期に形成されていた地域間関係あるいは地域間交流ネットワークが基盤となっていることはいうまでもないが、ハラッパー文化の成立は先文明期の地域間関係を再編させた意味において、文明社会の成立を考える重要な鍵となる。シン

ド地方およびパンジャブ地方西部で成立したと考えられるハラッパー文化は、その形成過程を評価するには資料がきわめて限られており、今後の調査・研究の進展を俟たざるを得ない。

一方で、ハラッパー文化がシンド・パンジャブ地方西部の周辺地域にいつ拡散したかという、文明社会の成立を考えるもう一つの手がかりについては、上に述べたように文明期前期にハラッパー文化が各地に拡散し、在地の地域文化と組み合わせさせて文明期の地域社会を形成し、文明社会全体を成立させるにいたったことが明らかになりつつある。

以上のように、文明社会の成立を考える際、先文明期の地域社会・文化の様相、ハラッパー文化の成立、ハラッパー文化の拡散による新たな地域社会の枠組みの成立と地域間関係の形成という、段階的に考察を加えていく必要がある。そこに都市という地域社会および地域間交流の核となる空間の形成、インダス式印章、ハラッパー式彩文土器といった文明社会のシンボルの創出がどのように絡んでいるのか明らかにしていくことが求められる。こうした文明社会の成立過程の研究戦略において、ガッガル平原の様相がファルマーナー遺跡の調査を通して明らかにできたことは大きな成果である。

## 5 ポスト・インダス文明期

インダス文明社会の衰退とは、文明期に構築された広域社会の仕組みの崩壊もしくは変容である。都市の衰退、文字の非使用化といった現象は、そうした文明期の社会システムを支えた諸制度が機能しなくなったことを意味している。したがって、どのように広域社会の仕組みが崩壊もしくは変化したのか、それが各地の地域社会にどのような影響を与えたのか、あるいはどのような現象となって立ち現れてくるのか理解することが、文明社会の衰退の過程を解明する糸口となる。

ここで問題となるのは、何をもって文明衰退の時期を把握するかという点である。上述のように俯瞰的には都市の衰退と文字の非使用化という最も明瞭な指標が文明の衰退現象として存在しているが、個々の遺跡において現出するさまざまな変化を文明社会の衰退と明確に結びつけることは決して容易ではない。例えば、ポスト文明期にはシンド地方の文化としてジューカル文化 (Majumdar 1934; Mackey 1943; Mughal 1992) が、またパンジャブ地方西部には H 墓地文化 (Vats 1940; Wheeler 1947) が、ガッガル平原にはバーラー文化 (Sharma 1982) とミタータル IIB 期文化 (Suraj Bhan 1975) が位置づけられているが (図 13)、これらの文化の併行関係は不明である。結果的にポスト文明期のこれらの文化の間に関係が存在するののかもわかっていない。

また、個別の遺跡の調査においては、遺構にみられる変化をもって時期区分が設定され、それに出土土器が組み合わせられて遺跡編年が組み立てられるのが南アジア考古学の一般的手法であるが、個別の遺跡での遺構の変遷と土器編年の間に齟齬が生じることになり、遺跡ごとに生じる諸々の変化を共通の土器編年で位置づけるという作業を難しくする。例えば、ドーラーヴィーラー遺跡は VI 期に居住域が大きく縮小することから都市の衰退現象を示すものとしてポスト文明期 (後期ハラッパー文化期) に位置づけられるが、ハラッパー遺跡の編年と照らし合わせてみると、文明期である 3C 期に併行する可能性が高い。というのも、ハラッパー遺跡 3C 期に特徴的な文字のみを刻んだ印章がドーラーヴィーラー遺跡 VI 期にも出土しているからで



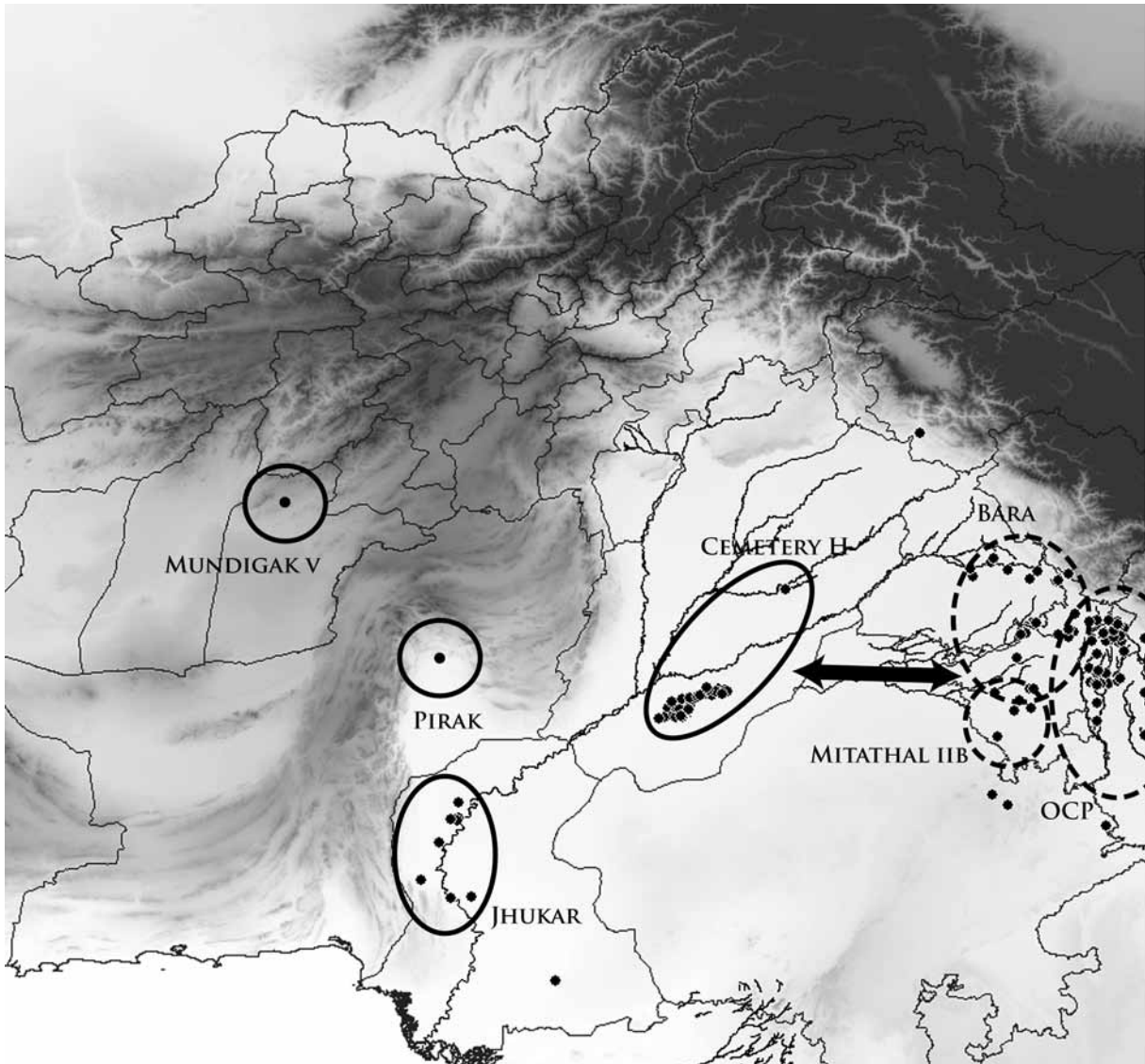


図 13 前 2 千年紀前半（ポスト文明期）における地域文化

ある。とすれば、ドーラーヴィーラー遺跡 VI 期は文明期に位置づけられることになり、さらには文明期に都市の衰退現象が生じていることになる。このように、都市の衰退には地域あるいは遺跡ごとにずれがあることは文明社会の衰退を理解する上できわめて重要な手がかりであり、共通の編年軸である土器編年を整備し遺跡の変転を時間軸上に位置づけていくことが求められるであろう。

ただし、ここで状況を難しくしているのは、ポスト文明期に位置づけられている諸文化を特徴づける土器群が地域ごとに異なっている点で、地域土器様式群間の併行関係の把握は決して容易ではない。また、地域土器様式が必ずしもハラッパー式土器を祖型としておらず、在地の土器様式が変化して成立したことがあることも、併行関係の把握を難しくしている。いかに地域土器様式間の併行関係を把握するかが課題であるといえよう。

上述のように、ガッガル平原においてはポスト文明期の土器様式としてバーラー式土器とミタータル IIB 期式土器が知られている（図 14）。バーラー式土器はパンジャブ州北部に所在するバーラー遺跡を標式として設定された土器様式で、各種壺・鉢・高杯によって構成される。壺では広口短頸壺や広口長頸壺を特徴とし（図 14: 1-12）、丸底が一般的である（図 12）。鉢は

小形鉢および広口鉢（図 14: 13-15）を特徴とする。高杯は短脚のものが多く（図 14: 19）、口縁部が大きく垂下する器形（図 14: 18）も特徴的である。彩文土器を含み、壺では胴部上半に文様帯を設けて、動植物文や幾何学文を描く（図 14: 3, 7, 8, 10, 11）。また、櫛描沈線文による装飾を施す壺も存在する（図 14: 9）。小形鉢は大きく外方に開く口縁部内面に平行線文を複数単位に描く。広口鉢では水平平行線文が描かれる。垂下口縁高杯では口縁部外面に幾何学文や植物文を描く（図 14: 18）。

バーラー式土器については、Y.D. Sharma がバーラー遺跡の出土層位に基づいて、文明期からポスト文明期にいたるまで在地の土器として存続した土器様式として位置づけている（Sharma 1982）。残念ながら、バーラー遺跡の層位出土資料は一部を除いて公表されておらず、Sharma の説の当否を具体的に検証することには制約があるが、壺の口頸部を広く黒色帯で塗り潰すという特徴や、胴部上半に広く文様帯を設ける特徴などは、ソーティ・シースワール式土器に類似する。また櫛描沈線文はそれが施される器種が異なるものの、ソーティ・シースワール式土器の特徴的な装飾技法である。さらに、丸底という底部形態は、高速回転利用という製作技術と結びついて平底を志向するハラッパー式土器とは異なる製作技法を意味している。線条ミガキが多用される点も、ハラッパー式土器の表面調整技法とは異なる点で、ソーティ・シースワール式土器との関係性を示唆している。その一方で、口縁部が肥厚して短く外反する大形広口鉢は胴部に施される水平平行線文とともにハラッパー式土器との類似性を示している。こうした諸点を総合的に考慮すると、バーラー式土器はソーティ・シースワール式土器の要素とハラッパー式土器の要素が混在していることが指摘できる。

一方、ミタータル IIB 期式土器はハリヤーナー州に所在するミタータル遺跡 IIB 期出土土器を標式とする（Suraj Bhan 1975）。各種壺・鉢・高杯というバーラー式土器に共通する器種構成からなるが、器形の点ではバーラー式土器との共通点と差異の双方を示す。壺では広口短頸壺（図 14: 29-31）を中心として長頸壺（図 14: 28, 32）がわずかに報告されているが、広口短頸壺ではバーラー式土器にもみられる肥厚して短く外反する口縁に加えて、肥厚せずに斜め外方に開く口頸部をもつバーラー式土器にはみられない器形が存在する（図 14: 30, 31）。丸底が中心となる点や線条ミガキを多用する点ではバーラー式土器に共通する（図 14: 22）。彩文で見ると、水平平行線文と狭い文様帯に鋸歯文を描く例が特徴的である。その一方で小形壺では胴部上半に文様帯を設けて斜格子充填三角文を描く例があり、バーラー式土器に共通する。鉢では口縁が短く外反する器形が特徴的で、水平平行線文と平行短線文を描く例が多くみられる（図 14: 20, 21, 23）。一方、高杯では口縁部が大きく垂下する杯をもつ例があり、その外面に彩文を施すなどバーラー式土器との共通性を示している。また、口頸部が短く外反して開く広口浅鉢（図 14: 24, 25）もバーラー式土器に共通するものである。ここではバーラー式土器とは異なる土器群をミタータル IIB 期式土器として定義し、バーラー式土器と交流関係を有する土器様式として理解することにした。

ミタータル IIB 期式土器の系譜に関しては、上述のバーラー式土器がハラッパー式土器の要素も含むのとは異なり、ソーティ・シースワール式土器の要素と新たに出現する要素から構成されているに注目できる。口頸部が肥厚せずに斜め外方に開く広口短頸壺や広口短頸鉢は、器形的には先文明期のソーティ・シースワール式土器に近い。文明期のソーティ・シースワール式土器については十分な報告例がないが、ファルマーナー遺跡では良好な資料が得られている。それによれば黒色帯と単純な幾何学文を特徴とした先文明期のソーティ・シースワール式土器

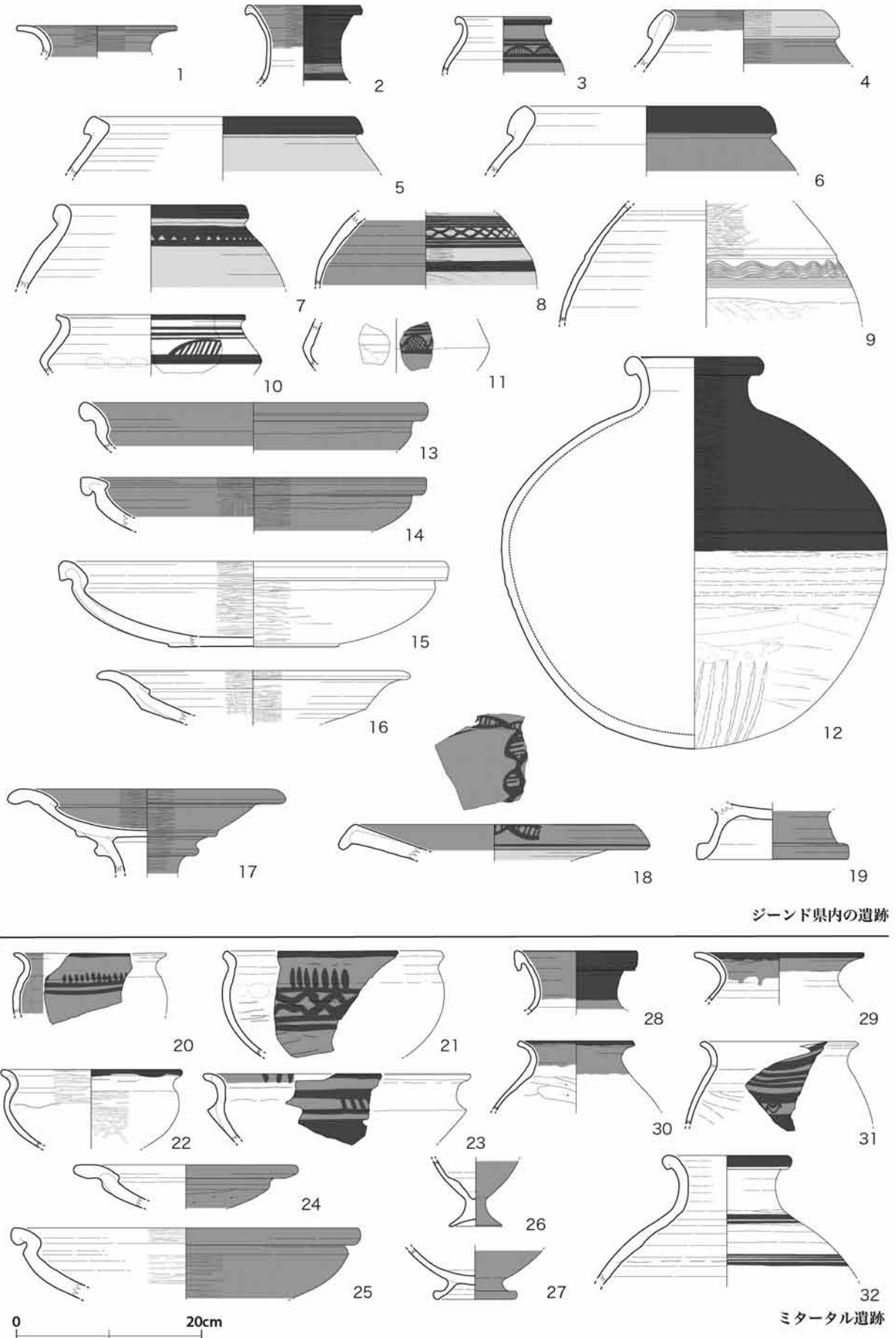


図 14 ガッガル平原におけるポスト文明期の土器

とは異なり、胴部上半に文様帯を区画して、そこに幾何学文や変形獣角文を描く壺が出現する。ただし、これらは共伴するハラッパー式土器からみて文明期前半の特徴であり、そこから文明期後半、さらにはポスト文明期へとどのように変化したのか、その過程は不明である。バーラー式土器とは異なる過程を経て成立したことは確実であり、文明期に在地の土器として展開したソーティ・シースワール系統の土器にも、ハラッパー式土器との関係も含めて複数の地域型が存在した可能性を示している。あるいは文明終末期からポスト文明期における地域間関係の再編の中で、在地の地域土器様式群の分化が進んだ可能性もあろう。

このようにバーラー式土器とミタータル IIB 期式土器は互いに共通する特徴を有する一方で異なる特徴もあり、両者の関係が注目される。両者が先後関係にあるのか、あるいは同時期に地域を分けて存在し交流関係を有していたのかという点である。残念ながらバーラー式土器にしてもミタータル IIB 期式土器にしても、その分布範囲が確定されておらず、両者の関係を検討するには今後の調査が不可欠である。V. Dangi によって進められているハリヤーナー州域の遺跡分布調査の成果 (Dangi 2009) によれば、ガッガル川とチョウタング川に挟まれるジーンド県ではバーラー式土器が中心的に出土しており、ミタータル IIB 期式土器に特徴的な非肥厚口縁の広口短頸壺や広口短頸鉢は確認されていない (図 14 上)。さらにガッガル川を上流にさかのぼったクルクシェートラ県でもバーラー式土器のみが分布している。このバーラー式土器の分布からみれば、ミタータル IIB 期式土器はチョウタング川以南に限定される可能性が浮上する。すなわち両者は少なくとも分布域を違えている可能性があるだろう。

バーラー式土器およびミタータル IIB 期式土器と、西の H 墓地文化、東の赭色土器文化 (Lal 1954) との関係はどうだろうか。

H 墓地文化はハラッパー遺跡の H 地区で発見された墓地を標式とする文化で (Vats 1940; Wheeler 1947)、パンジャブ地方西部およびハークラー川流域のチョーリスターン地方 (Mughal 1997) において確認されている。墓葬に副葬された土器であることから集落出土のバーラー式土器やミタータル IIB 期式土器とはその機能・特徴を違えている可能性が高いが、独特の彩文土器を有する。コブウシとヤギが融合したかのような動物文や、人物と動物を組み合わせた図像など、ほかの土器様式にはみられない彩文を特徴としている。その一方で、丸底の底部形態と線条ミガキはバーラー式土器やミタータル IIB 期式土器に共通する要素であり、ハラッパー式土器との差異を示している。

アメリカ隊によるハラッパー遺跡の調査成果によれば、文明期後期に相当する 3C 期と H 墓地文化期に相当する 5 期の間には移行期として 4 期が設定されており、文明期にはみられない特徴をもった土器の出現が確認されている (Kenoyer 2005)。資料が十分に公表されていないため詳細な検討は今後の課題であるが、前 1900 年頃を境としてハラッパー文化が衰退し、新たな要素が出現することは重要である。そこに窺われるのはハラッパー文化が漸次変化してポスト文明期の文化へと変容していくのではなく、ハラッパー文化とは異なる系譜をもった文化が出現し、衰退していくハラッパー文化と交渉を有しつつ、ポスト文明期の社会を形成していったと想定することが可能であろう。

一方、赭色土器文化は、当初この文化を代表する土器が洪水層から出土し、著しく摩耗を受けて本来の特徴が判然としなかったことから名付けられた名称である。ガンガー＝ヤムナー・ドーアープ地方を中心に広く分布するが、そのうちアトランジーケーラー遺跡 (Gaur 1983) とラール・キラール遺跡 (Gaur 1995) の調査で、良好な資料が得られている。それによれば、ソー

ティ・シースワール式土器に類似する要素、バーラー式土器に共通する要素、そして独自の要素が混在している。ソーティ・シースワール式土器に類似する要素としては、口頸部を黒色帯によって塗り潰す特徴や平行線文を組み合わせた幾何学文がある。バーラー式土器との共通点としては、長頸壺や櫛描平行沈線文を施した壺などを挙げることができる。角状の文様はソーティ・シースワール式土器にもバーラー式土器にも類似する特徴である。独自の要素としては、注口付広口鉢や突帯・浮文といった要素を挙げることができる。

アトランジーケーラー遺跡およびラール・キラー遺跡の発掘調査を実施した R.C. Gaur は、赭色土器文化を先文明期の文化的系譜をもつ人々が西方（彼はインダス川流域とする）から移住して成立した文化であると指摘する（Gaur 1995: 182-183）。彼がいうように、ガンガー＝ヤムナー・ドーアーブ地方では先文明期以降の在地文化の存在が不明であり、ポスト文明期における西方からの人々の移住と文化の拡散が生じた可能性は高い。ただし、それはインダス川流域からではなく、ガッガル平原を起点とするものと考えられるであろう。ソーティ・シースワール式土器やバーラー式土器との共通要素がこの点を示している。

以上、ポスト文明期に位置づけられる諸文化について瞥見してきたが、それぞれの文化にはさまざまな系譜を引く要素が混在するかたちで存在しており、その絡まった糸を解きほぐしていく必要がある。現在得られている資料では、文明期のガッガル平原には少なくともソーティ・シースワール文化とハラッパー文化という2つの文化系統の存在を確認することができるが、両者は相互関係のもとに当時の地域社会の仕組みを構成していたと考えられ、その関係のもとで文化要素の共有が起こりうる状況が存在した可能性が高い。実際にソーティ・シースワール文化には複数の地域系統が含まれている可能性があり、それらがハラッパー文化も含めてより複雑な文化系統間の交流関係を形成していたと想定される。

ポスト文明期の諸文化はそうした在地文化とハラッパー文化の錯綜する関係が都市社会という仕組みの解体を経て再編された結果、新たな地域社会の仕組みをもって成立したと予測できる。それがさまざまな文化系統に属する要素の混在という現象を引き起こしているのであろう。都市社会の仕組みが失われたことによって、先文明期以来のさまざまな文化系統が変容しつつポスト文明期の文化として顕在化したと考えることができる。ただし、それは先文明期以来の在地文化が変化することなくポスト文明期まで続いたのではなく、文明期のハラッパー文化との交流関係を経て文化的にも変容して成立したものである可能性は十分に考慮する必要がある。また、文明期に周辺地域から異なる文化要素が流入している可能性も十分にあり、資料を系統的に位置づけ、それらを文化系統間の関係性という視点から体系化していくことが求められる。

ガッガル平原を含むインダス平原北半部におけるポスト文明期の諸文化を系統的に理解するには絶対的に資料が不足している。H 墓地文化のように葬送行為に結びついた独特な彩文土器の出現は、文明期の社会の仕組みが解体し、新たな地域社会のイデオロギーとアイデンティティが形成されたことを物語っているが、そうした新たな地域社会の枠組みがいかにして形成されたのか依然として不明である。かつてはH 墓地文化にみられる要素をアリア人との関係において説明する試みもなされたが、そうした外部に出自する文化要素の流入や社会・文化集団の移住も視野に入れながら、ポスト文明期の社会を復元していくことが必要である。

広域に展開したインダス文明社会はハラッパー文化と各地の地域文化との関係、さらに文明域外の周辺地域との関係において、多面的かつ重層的な特質を有しており、文明社会の衰退過

程においてもそうした特質が深く関与していると考えらるべきであろう。文明社会の展開を静的ではなく動的に把握していく視点と方法論が要請される所以である。

## 6 彩文灰色土器文化期

ガッガル平原において、ポスト文明期の文化と彩文灰色土器文化との関係は、アーリア人の移住問題とも関連して、考古学上の重要な課題となってきた (Lal 1954; Gaur ed. 1994)。B.B. Lal は彩文灰色土器を西方につながる灰色土器群の一つとして位置づけ、アーリア人の移住と関連づけた。その後、バーラー式土器と彩文灰色土器の同時併存および2系統の文化集団の共住の可能性がバグワンプラ遺跡で指摘されるようになり (Joshi 1993)、両者が時期的に断絶することなくガッガル平原に展開する可能性が高くなった。この現象を捉えて、バーラー式土器から彩文灰色土器が創出されたとする文化的連続性を主張する説までが登場した (Shaffer 1986)。J. Shaffer は彩文灰色土器とアーリア人との関連性を否定している。

ここで問題を整理しておく、彩文灰色土器の起源をどのように位置づけるか、すなわちバーラー文化と彩文灰色土器文化の関係が焦点となる。そこでまず彩文灰色土器の特徴について概観しておこう。この土器はその名称が的確に示しているように、還元焰焼成技術によって灰色・硬質に焼き上げられた彩文土器である。器種には鉢と皿 (浅鉢) が主体で、わずかに小形壺が伴う。鉢は浅い丸底の底部から屈曲をもって垂直方向に直線的に伸びる円筒形胴部および直口口縁をもつもの (以下、直口鉢)、全体の形状が半球形を呈するもの (以下、半球形鉢)、浅い丸底から屈曲部をもって外反して開く口頸部を有する小形のもの (以下、外反口縁小形鉢) をからなる。皿には大別して2系統の器形があり、浅い丸底から丸く彎曲し内傾して伸びる胴部・口縁部を有するものと、浅い丸底から屈曲部をもって直線的に伸びる胴部・口縁部を有するものからなる。彩文は鉢の場合外面に、皿では内外両面もしくは内面底部を中心に描かれる。形象文はまったくなく、平行直線・曲線文、列点文を組み合わせる幾何学文を描く。同心円状半円文も一般的にみられる彩文要素である。皿の内面底部には同心円状半円文を組み合わせる花卉状に描く例もある。

このように彩文灰色土器は食膳具と推定される器形を中心とするものであり、貯蔵・調理用の土器として赤色系軟質土器が伴う。壺が主体であり、貯蔵用にも調理用にも壺が用いられている。

彩文灰色土器と赤色系軟質土器からなる彩文灰色土器様式は、バーラー式土器とは器種構成・器形、さらには製作技法にいたるまでまったく別個の土器様式である。したがって、バーラー式土器を直接の祖型として彩文灰色土器様式が成立したと考えるのは不可能である。Shaffer が説くような文化的連続性は少なくとも表面的には存在しない。仮にバーラー文化の内部から彩文灰色土器様式が出現したとするならば、土器生産体制の全面的刷新が起こったと考えるほかはないであろう。少なくとも型式学的視点からは両者はまったく別の土器様式なのである。

彩文灰色土器はガッガル平原からガンガー＝ヤムナー・ドーアール地方を中心に分布しているが、西はガッガル川沿いにチョーリスターン地方まで分布している (図 15)。きわめて広範に分布する土器であり、起源地をどこに求めるかが一つの研究課題となる。J.P. Joshi は、ジャンム地方の山岳部に位置するマーンダー遺跡で出土した厚手灰色土器を彩文灰色土器に先行

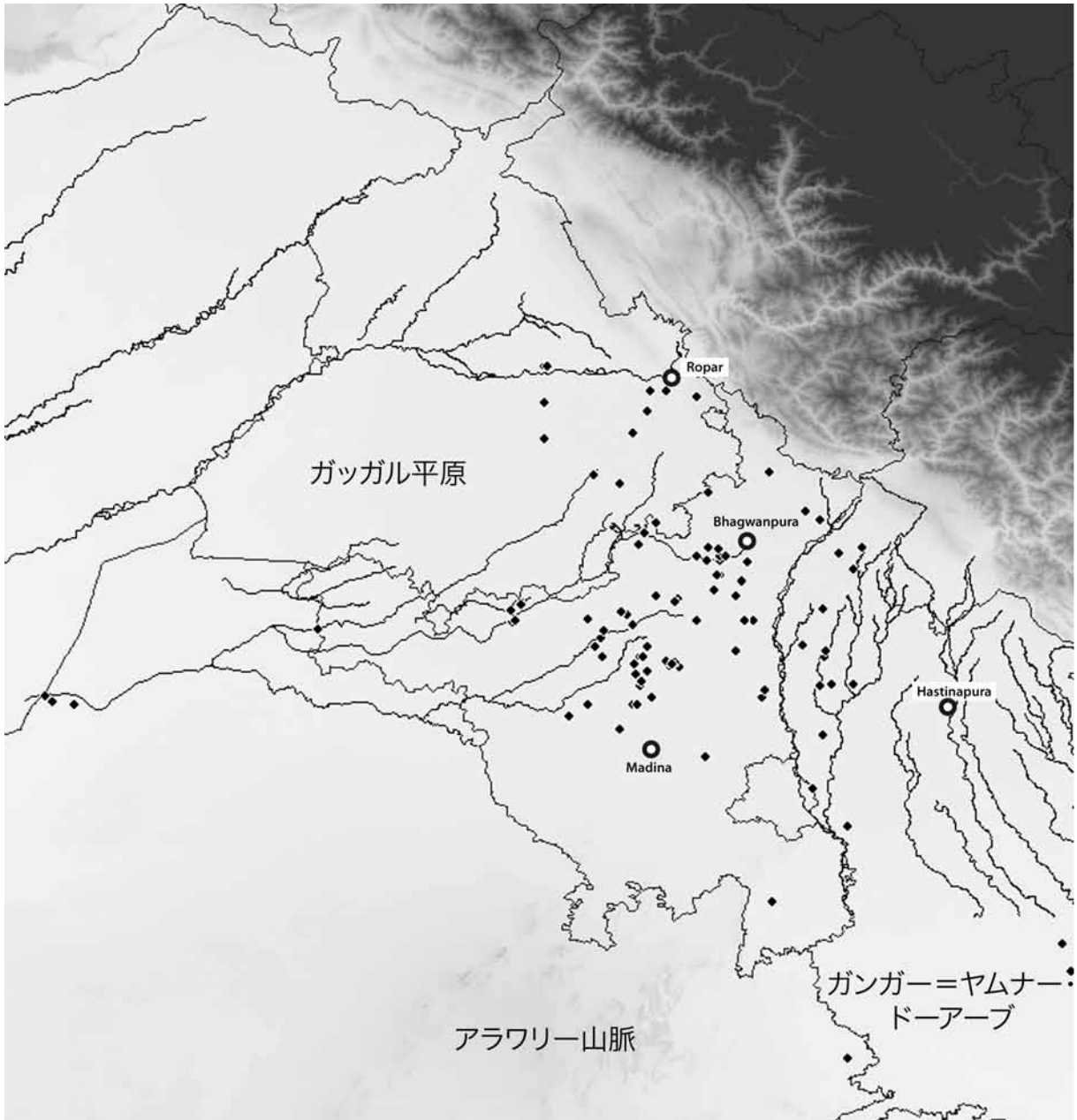


図 15 ガッガル平原における彩文灰色土器の分布

する土器とするが (Joshi 1993)、実測図等が公表されておらず判然としない。逆に前2千年紀後半に東方のガンガー平原に分布する黒縁赤色土器とは、器種構成のレベルで共通するものの、器形が大きく異なっており、交流関係は想定できても系譜関係を見出すことはできない。また、西方に起源を求める説にしても、関連する資料がパンジャブ地方西部以西には存在しないことから、論理的にも不可能であろう。

このように彩文灰色土器の起源は今のところまったく不明といわざるを得ないが、バグワンプラ遺跡の調査によって可能性が指摘された彩文灰色土器とバーラー式土器の同時併存という現象はきわめて重要である。両者の間に時間的断絶が存在せず、ガッガル平原を中心に共存していたとすれば、両者の関係はポスト文明期から続く初期歴史時代への移行を考える上で大きな手掛りとなる。この同時併存については慎重な姿勢を示す研究者もおり、調査の進展が不可欠である。近年調査が実施されたハリヤーナー州ローフタク県に所在するマディナ遺跡では、

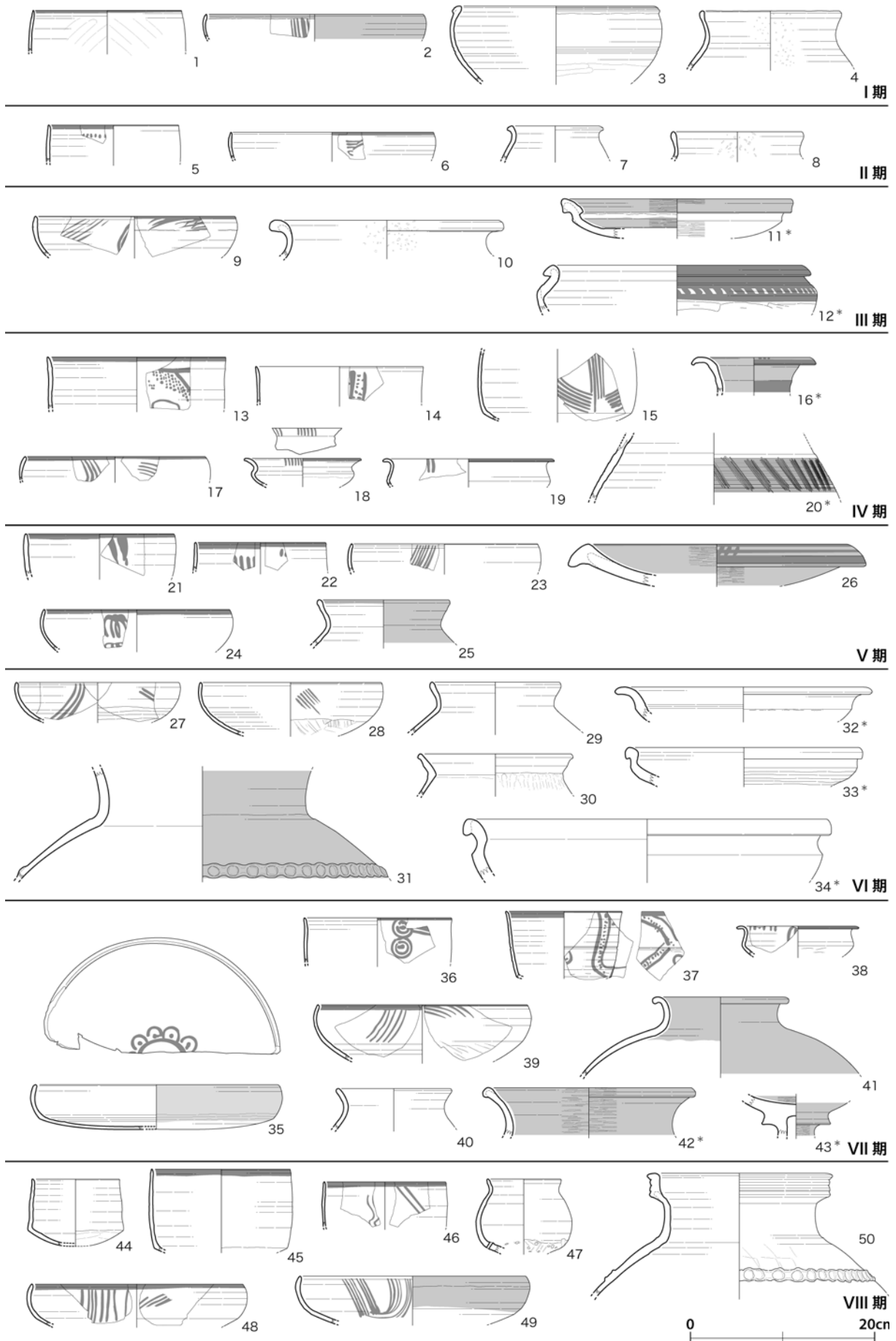


図 16 マディナ遺跡出土土器 (\*はパーラー式土器)



8期に細別される遺構面および包含層から彩文灰色土器とともにバーラー式土器が出土している（図16）（Manmohan Kumar *et al.* 2009）。その数量はきわめて少ないが、ファイアンス製腕輪の出土も勘案すると、バーラー式土器の混入ではない可能性が高い。

彩文灰色土器文化の遺跡は小規模なものが多く、遺跡規模の分化はみられない。したがって、中心地として機能する集落の存在は想定できないが、その一方できわめて広範な地域に分布する状況は、彩文灰色土器文化の社会を考える上での手がかりとなろう。拡散志向の強い社会・文化である可能性が強く、その性格は最終的にバーラー文化に取って代わったこととも関連しているであろう。前1千年紀前葉にはガンガー平原西半部に広く分布するようになり、東方の黒縁赤色土器文化との交流関係が顕在化する。彩文灰色土器の型式学的分析とその時間的形態変化は今後の課題であるが、次第に東方のガンガー平原に中心地が移っていった可能性があり、その過程で前1千年紀中葉には東の北方黒色磨研土器との交流関係が築かれるとともにガンガー平原における都市化が進行することになる。大局的に俯瞰すれば、彩文灰色土器文化は、ガッガル平原およびガンガー＝ヤムナー・ドーアール地方を中心に展開しながら、かつてのガッガル平原以西に広がった地域間交流ネットワークを東方志向へと転換させ、ガンガー平原の開発・都市化を導いたという点で重要な役割を果たしたと評価できるであろう。そのネットワークの再編の実態をいかに捉えるかが今後の大きな課題であろう。

## 7 おわりに

以上、ガッガル平原における文化変遷の概観を軸に、そこに内包される問題について若干の考察を加えてきた。ガッガル平原は水系的には西のインダス平原につながっているが、東にはガンガー＝ヤムナー・ドーアール地方が隣接し、インダス平原とガンガー平原をつなぐ役割を果たしてきた地域である。ガッガル川を中心とする河川およびそれによって形成される沖積平野が、人類に対して耕作地を含む居住空間を提供するとともに、情報・物資の流通およびその結果形成される地域間交流ネットワークの舞台となってきたことは、先インダス文明期からポスト文明期にかけての文化変遷にも明確に窺うことができるであろう。

先文明期にはすでに西のパンジャール地方西部との交流関係が構築されるとともに、ガッガル平原独自の文化的伝統を醸成し、以降、その時々地域間交流ネットワークを基盤としながら地域社会が形成されてきたのである。文明期には西方のハラッパー文化との交流関係を介してインダス文明社会に組み込まれ、ポスト文明期には在地の文化とハラッパー文化の関係から派生した地域社会の仕組みと文化伝統が生み出されることとなった。研究の現状ではポスト文明期から初期歴史時代への転換期の社会・文化の実態を明らかにすることは難しいものの、ポスト文明期にガッガル平原に展開した社会が続く彩文灰色土器文化の社会の基盤となっていることは確かであろう。その基盤の上に彩文灰色土器文化は東方のガンガー平原との関係を強め、初期歴史時代におけるガンガー平原の都市化をもたらすことになったのである。

長期にわたって人類活動の舞台となる中でさまざまな文化伝統が形成され、それらが相互に関係・重層化しながら地域社会がつくりだされてきた。そうした地域の文化伝統と社会の変転をいかに時空間軸上に位置づけ、その歴史的意義を考察していくかが今後の課題である。

本稿の作成にあたっては、マハーリシ・ダヤーナンド大学歴史学科の Manmohan Kumar 教授および博士課程学生の Vivek Dangi 氏より多大なるご教示・ご協力をいただいた。また、遠藤仁、小茄子川歩の両氏には貴重な助言を頂戴した。ご芳名を銘記して感謝申し上げたい。

【引用・参考文献】

- Ali, T. (ed.) (1994-95) Excavations in the Gomal Valley: Rehman Dheri Report no.2. *Ancient Pakistan* 10: 1-233.
- Bisht, R.S. (1977) *Banawali: A Look Back into the Pre-Indus and Indus Civilization*. Haryana Government, Chandigarh.
- Bisht, R.S. (1982) "Excavations at Banawali, 1974-77", in Gregory L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization*. Oxford & IBH, Delhi. pp. 113-124.
- Bisht, R.S. (1991) Dholavira: a new horizon of the Indus Civilization. *Purātattva* 20: 71-82.
- Bisht, R.S. (1999) Dholavira and Banawali: Two different paradigms of the Harappan urbis forma. *Purātattva* 29: 14-37.
- Dangi, V. (2009) "Recent Exploration in the Chautang Basin (Jind District, Haryana)", in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 9: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.73-163.
- Dani, A.H. (1970-71) Excavations in the Gomal Valley. *Ancient Pakistan* 5: 1-177.
- Dikshit, K.N. (1984a) "Late Harappa in Northern India", in B.B. Lal and S.P. Gupta (eds.) *Frontiers of the Indus Civilization: Sir Mortimer Wheeler Commemoration Volume*. Indian Archaeological Society, New Delhi. pp.253-269.
- Dikshit, K.N. (1984b) "The Sothi Complex: Old Records and Fresh Observations", in B.B. Lal and S.P. Gupta (eds.) *Frontiers of the Indus Civilization: Sir Mortimer Wheeler Commemoration Volume*. Indian Archaeological Society, New Delhi. pp.531-537.
- Durrani, F.A. (1988) Excavations in the Gomal Valley: Rehman Dheri excavation report no.1. *Ancient Pakistan* 6: 1-232.
- Durrani, F.A, I. Ali and G. Erdosy (1991) Further Excavation at Rehman Dheri. *Ancient Pakistan* 7: 61-151.
- Gaur, R.C. (ed.) (1994) *Painted Grey Ware: Proceedings of Seminar on Archaeology held at Aligarh Muslim University, Aligarh*. Publication Scheme, Jaipur.
- Gaur, R.C. (1995) *Excavations at Lal Qila - A Habitational OCP Site & A Unique Copper-Hoard from Kiratpur*. Publication Scheme, Jaipur.
- Gupta, S.P. (1996) *The Indus-Saraswati Civilization - Origins, Problems and Issues* -. Pratibha Prakashan, Delhi.
- Hegde, K.T.M., V.H. Sonawane, D.R. Shah, K.K. Bhan, P. Ajitpresad, K. Krishnan and S. Prathapachandra (1988) Excavations at Nagwada - 1986-87: A preliminary report. *Man and Environment* 12: 55-65.
- Jarrige, C., J.-F. Jarrige, R. Meadow and G. Quivron (eds.) (1995) *Mehrgarh: Field Reports 1974-1985 from Neolithic Times to the Indus Civilization*. The Department of Culture and Tourism of Sindh and Department of Archaeology and Museums, French Ministry of Foreign Affairs, Karachi.
- Jarrige, Jean-François (1986) Excavations at Mehrgarh-Nausharo. *Pakistan Archaeology* 10-22: 63-134.
- Jarrige, J.-F. (1988) Excavation at Nausharo. *Pakistan Archaeology* 23: 149-203.
- Jarrige, J.-F. (1989) Excavation at Nausharo, 1987-88. *Pakistan Archaeology* 24: 21-68.
- Jarrige, J.-F. (1990) Excavation at Nausharo, 1988-89. *Pakistan Archaeology* 25: 193-240.
- Joshi, J.P. (1993) *Excavations at Bhagwanpura 1975-76 and Other Explorations & Excavations 1975-81 in Haryana, Jammu & Kashmir and Punjab*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.89. Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Kenoyer, J.M. (2005) Culture change during the Late Harappan period at Harappa: new insights on Vedic Aryan issues. *The Indo-Aryan Controversy: Evidence and inference in Indian history*. Routledge, London/New York. pp.21-49.
- Khan, F. A. (1965) Excavations at Kot Diji. *Pakistan Archaeology* 2: 11-85.

- Kharakwal, J.S., Y.S. Rawat and T. Osada (2007) “Kanmer: A Harappan Sites in Kachchh, Gujarat, India”, in T. Osada (ed.) *Occasional Paper 2: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.21-46.
- Kharakwal, J.S., Y.S. Rawat and T. Osada (2008) “Preliminary Observations on the Excavation at Kanmer, Kachchh, India 2006-2007”, in T. Osada (ed.) *Occasional Paper 5: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.5-23.
- Lal, B.B. (1954) Excavation at Hastinapura and Other Explorations in the Upper Ganga and Sutlej Basins 1950-52. *Ancient India* 10-11: 5-151.
- Lal, B.B., B.K. Thapar, J.P. Joshi and M. Bala (2003) *Excavations at Kalibangan: The Early Harappan (1960-69)*. Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Meadow, R.H. (ed.) (1991) *Harappan Excavations 1986-1990: A Multi-disciplinary Approach to Third Millennium Urbanism*. Prehistory Press, Madison.
- Khatri, J.S. and M. Acharya (1995) Kunal: A new Indus-Saraswati site. *Purātattva* 25: 84-85
- Mackay, E.J.H. (1938) *Further Excavations at Mohenjo-daro*. Government of India, Delhi.
- Mackay, E.J.H. (1943) *Chanhu-daro Excavations, 1935-36*. American Oriental Society, New Haven.
- Majumdar, N.C. (1934) *Explorations in Sind: Being a report of the exploratory survey carried out during the years 1927-28, 1929-30 and 1930-31*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.48. Manager of Publications, Delhi.
- Manmohan Kumar (2009) “Harappan Settlement in the Ghaggar-Yamuna Divide”, in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 7: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.1-75.
- Manmohan Kuma, V. Shinde, A. Uesugi, V. Dangi, Sajjan Kumar and Vijay Kumar (2009) “Excavations at Madina, District Rohtak, Haryana 2007-08: A Report”, in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 7: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.77-177.
- Marshall, J. (1931) *Mohenjo-daro and the Indus Civilization*. Arthur Probsthain, London.
- Mughal, M.R. (1970) *The Early Harappan Period in the Greater Indus Valley and Northern Baluchistan*. Unpublished Ph.D Dissertation. University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Mughal, M.R. (1992a) “Jhukar and the Late Harappan cultural mosaic of the Greater Indus Valley”, in M. Taddei (ed.) *South Asian Archaeology 1989*. Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Rome. pp. 213-222.
- Mughal, M.R. (1997) *Ancient Cholistan: Archaeology and Architecture*. Ferozsons, Lahore.
- Nath, Amarendra (1998) Rakhigarhi: A Harappan metropolis in the Sarasvati-Drishadvati divide. *Purātattva* 28: 39-45.
- Nath, Amarendra (1999) Further excavations at Rakhigarhi. *Purātattva* 29: 46-49.
- Nath, Amarendra (2001) Rakhigarhi: 1999-2000. *Purātattva* 31: 43-46.
- Quivron, G. (2000) The Evolution on the Mature Indus Pottery Style in the Light of the Excavations at Nausharo, Pakistan. *East and West* 50(1-4): 147-190.
- Rao, L.S., Nandini B. Sahu, Prabhash Sahu, U.A. Shatry and Samir Diwan (2004) Unearthing Harappan settlement at Bhirrana (2003-04). *Purātattva* 34: 20-24.
- Rao, L.S., Nandini B. Sahu, Samir Diwan, Prabhash Sahu and U.A. Shatry (2005) New light on the Excavation of Harappan settlement at Bhirrana. *Purātattva* 35: 60-68.
- Rao, L.S., Nandini B. Sahu, U.A. Shatry, Prabhash Sahu and Samir Diwan (2006) Bhirrana Excavation: 2005-06. *Purātattva* 36: 45-49.
- Rao, S.R. (1979) *Lothal, A Harappan Port Town (1955-62)*, vol.I. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.78.

- Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Rao, S.R. (1985) *Lothal, A Harappan Port Town (1955-62)*, vol.II. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.78. Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Sant, Urmila, T.J. Baidya, N.G. Nikoshey, N.K. Sinha, S. Nayan, J.K. Tiwari and A. Arif (2005) Baror: A New Harappan Site in Ghaggar valley: A Preliminary Report. *Purātattva* 35: 50-59.
- Sarcina, Anna (1979a) “The private house in Mohenjo-daro”, in M. Taddei (ed.) *South Asian Archaeology 1977*. Istituto Universitario Orientale Seminario di Studi Asiatici, Naples 2: 433-462.
- Shaffer, J. (1986) “Cultural Development in the Eastern Punjab”, in J. Jacobson (ed.) *Studies in the Archaeology of India and Pakistan*. Oxford & IBH Publishing Co., Delhi. pp. 195-235.
- Sharma, Y.D. (1982) “Harappan Complex on the Sutlej (India)”, in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp.141-165.
- Shinde, V., T. Osada, M.M. Sharma, A. Uesugi, T. Uno, H. Maemoku, P. Shirvalkar, Sh.S. Deshpande, A. Kulkarni, A. Sarkar, A. Reddy, V. Rao and V. Dangi (2008a) “Exploration in the Ghaggar Basin and excavations at Girawad, Farmana (Rohtak District) and Mitathal (Bhiwani District), Haryana, India”, in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 3: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp. 77-158.
- Shinde, V., T. Osada, Manmohan Kumar and A. Uesugi (2008b) “A Report on Excavations at Farmana 2007-08”, in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 6: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp. 1-116.
- Suraj Bhan (1971-72) Siswal - a pre-Harappan site in Drisadvati valley. *Purātattva* 5: 44-46.
- Suraj Bhan (1975) *Excavation at Mitathal (1968) and Other Explorations in the Sutlej-Yamuna Divide*. Kurukshetra University, Kurukshetra.
- Uesugi, A. (2008) “Cultural Interaction between the Indus Valley and the Iranian Plateau”, in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Cultural Relations between the Indus and the Iranian Plateau during the Third Millennium BCE*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.20-24.
- Vats, M.S. (1940) *Excavations at Harappa*. Government of India Press, Delhi.
- Wheeler, M. (1947) Harappa 1946: The defenses and cemetery R-37. *Ancient India* 3: 58-130.
- 上杉彰紀 (2008a) 「インダス文明社会の成立と展開—地域間交流の視点から—」『古代文化』60(2): 111-120.
- 上杉彰紀 (2008b) 「インダス・プロジェクトによるインダス遺跡の発掘調査」『環境変化とインダス文明 2007 年度成果報告書』総合地球環境学研究所インダス・プロジェクト、83-114 頁.
- 上杉彰紀・小茄子川歩 (2008) 「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察—彩文土器の編年を手掛りとして—」『西アジア考古学』9: 101-118.